

独立行政法人国立文化財機構の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

全体評価

<参考> 業務の質の向上:A 業務運営の効率化:A 財務内容の改善:A

①評価結果の総括

- ・国立文化財機構は、調査研究、保存、展示、教育、国際協力等の多角的事業を展開し、日本文化の国内外の発信に努め、国民の文化向上に資するとともに、国際親善に貢献し、国の文化財保護政策におけるナショナルセンターとしての機能を果たしていると評価できる。
- ・展示・研究業務は充実し、保存修復事業と合わせて、我が国文化事業の推進役としての機能は十二分に発揮されていると認められる。
- ・後継者養成事業や啓蒙的な普及・教育事業、並びに広報事業は効率的でインパクトのある活動が展開されたことは、評価できる。
- ・業務運営面では、厳しい経済的条件の下で、各機関本来の機能を向上させながら、業務の効率化が図られている。

②平成24年度の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策(改善のポイント)

(1)事業計画に関する事項

- ・平常展示の充実は、博物館として本来あるべき姿を追求するものであり、今後も創意工夫の下に一層の充実を図りたい。「項目別-p11~15参照」
- ・国立文化財機構は、国内外の文化事業を支える重要な機能を果たしていることから、賛助会員や友の会等の充実も含め、事業内容をより多くの国民に理解してもらうための一層の取り組みが望まれる。「項目別-p27~28、38~40、84~86参照」
- ・保存科学や修復技術の専門家の研修や情報交換など、引き続き人材育成に積極的に取り組むことが望まれる。「項目別-p47~48、96~99参照」
- ・各事業とも成果が上がっており、事業の継続性に配慮した計画の策定が望まれる。その際、国立文化財機構の存在意義に照らし合わせ、社会のニーズのみでなくシーズを掘りおこす発想での事業計画をつくることが求められる。「項目別-p1~90参照」

(2)業務運営に関する事項

- ・IT技術の導入により、さらなる業務運営の効率化を推進し、時間の有効活用を図り、若手職員の研修を行う取組が必要である。また、情報漏えい等に対するセキュリティ強化を図ることも必要である。「項目別-p100~101、123~124、134参照」
- ・業務運営において、一般管理費及び人件費削減について取り組んでいるが、こうした経営効率化は限界点に達したと推察される。各機関の基礎体力を損なわぬよう留意が必要である。また、予算・職員数は、国際的水準と照らしても適切とはいいがたく、今後拡充が望まれる。「項目別-p114、126~133参照」

③特記事項

- ・東日本大震災後、国立文化財機構が中心となって文化財レスキュー事業に取組実績を上げてきた。特に、福島県放射能汚染地区からの文化財救出は、高く評価できる。
- ・一方で、文化財レスキュー事業などで業務は多様化かつ増大し、より高度の専門性が求められているが、予算削減、人件費削減が恒常化していることから、本来の業務の円滑な推進を妨げるおそれがある。

文部科学省独立行政法人評価委員会
文化分科会 国立文化財機構部会 名簿

<正委員>

永 村 眞 日本女子部大学文学部教授

<臨時委員>

上 原 眞 人 京都大学大学院文学研究科教授

内 田 篤 呉 (公財) 岡田茂吉美術文化財団・MOA美術館
業務執行理事・副館長

佐 野 みどり 学習院大学文学部哲学科教授

竹 本 幹 夫 早稲田大学文学学術院教授

筑 紫 みずえ (株) グッドバンカー代表取締役社長

宮 島 博 和 公認会計士

(以上7名)

独立行政法人国立文化財機構の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※				
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため	A	A				(中項目名)文化財保護に関する国際協力の推進	A	A			
(中項目名)歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	A	A				(小項目名)国際協力に関する研究基盤の整備	A	A			
(小項目名)収蔵品の収集	A	A				(小項目名)保存修復に関する技術移転の推進	A	A			
(小項目名)収蔵品の管理、保存	A	A				(小項目名)無形文化遺産保護の国際的充実	A	A			
(小項目名)収蔵品修理、保存処理	A	A				(中項目名)情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信	A	A			
(中項目名)文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	A	A				(小項目名)情報基盤の整備充実	A	A			
(小項目名)展示の充実	A	A				(小項目名)調査研究成果の公開・提供	A	A			
(小項目名)教育活動の充実	A	A				(小項目名)公開施設の運用	A	A			
(小項目名)快適な観覧環境の提供	A	A				(中項目名)地方公共団体への協力等による文化財保護の質の向上	A	A			
(小項目名)文化財情報の発信と広報の充実	A	A				(小項目名)地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制の構築	A	A			
(中項目名)我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与	A	A				(小項目名)中核的文化財担当者の研修・若手研究者の育成	A	A			
(小項目名)調査研究成果の発信	A	A				(大項目名)業務の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A			
(小項目名)海外研究者の招聘	S	A				(小項目名)業務の効率化	A	A			
(小項目名)博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施	A	A				(小項目名)給与水準の適正化等	A	A			
(小項目名)収蔵品貸与の推進	A	A				(小項目名)内部統制の充実・強化	A	A			
(小項目名)公私立博物館・美術館等に対する援助・助言	A	A				(大項目名)財務・人事	A	A			
(中項目名)文化財に関する調査及び研究の推進	A	A				(小項目名)予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	A	A			
(小項目名)調査研究の目的・内容の適切性／調査研究の実施状況／調査研究の成果の	A	A				(小項目名)人事計画に関する計画	A	A			

※当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

※「-」は当該年度では該当がないことを、「/」は終了した事業を表す。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
収入						支出					
運営費交付金	8,771	8,367	8,192	7,941	7,366	運営事業費	9,779	10,454	11,010	8,952	8,856
施設整備費補助金	1,872	2,331	5,094	4,414	10,273	人件費	3,507	3,244	3,162	3,116	2,806
文化芸術情報電子化推進費補助金	-	548	136	-	-	一般管理費	1,173	1,066	932	917	681
展示事業等収入	1,786	1,898	1,580	1,318	1,587	業務経費	5,098	6,144	6,916	4,919	5,369
受託収入	514	525	518	507	634	調査研究事業費	1,448	1,473	1,633	1,440	1,481
その他寄附金等	127	139	143	241	200	情報公開事業費	146	144	127	147	201
						研修事業費	22	17	18	16	18
						国際研究協力事業費	229	223	227	178	163
						展示出版事業費	112	163	150	196	213
						展覧事業費	3,079	4,050	4,672	2,846	3,229
						教育普及事業費	62	74	89	96	64
						施設整備費	2,106	2,212	5,094	4,414	10,273
						文化芸術情報電子化推進費	-	542	142	-	-
						受託事業費	503	492	507	512	620
計	13,070	13,808	15,663	14,421	20,060	計	12,388	13,700	16,753	13,878	19,749

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

運営費交付金収入の減少は、国家公務員給与特例法等に準拠した人件費予算の減額及び効率化による物件費予算の減額が主な要因である。

施設整備費(補助金)の増加は、前年度からの繰越によるものである。

展示事業等収入の増加は、還付消費税261百万円が主な要因である。

人件費の減少は、国家公務員給与特例法等に準拠したことによるものである。

国際研究協力事業費の減少は、国際情勢により研究の一部を延期したことによるものである。

展覧事業費の増加は、収蔵品購入額及び常設展経費の増加が主な要因である。

受託収入・受託業務費の増加は、東京国立博物館、奈良文化財研究所において新規契約があったことが主な要因である。

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
費用						収益					
経常経費	9,451	9,700	9,703	8,908	8,746	運営費交付金収益	6,861	6,364	6,792	6,430	5,864
人件費	4,025	3,842	3,804	3,829	3,615	受託収入	562	554	586	522	634
一般管理費	1,153	1,128	852	839	596	入場料収入	1,160	1,322	892	808	814
業務経費	4,273	4,730	5,047	4,240	4,535	展示事業等附帯収入	423	370	383	305	324
調査研究業務費	1,026	1,393	1,192	871	1,018	財産利用収入	150	159	154	184	178
情報公開業務費	130	124	122	129	189	寄附金収益	80	123	122	138	144
研修業務費	20	17	17	16	17	施設費収益	132	143	216	82	83
国際研究協力業務費	225	222	225	171	155	その他補助金収益	-	376	98	-	-
展示出版業務費	114	179	144	179	183	資産見返負債戻入	398	418	517	470	506
展覧業務費	1,819	1,894	2,299	1,771	1,770	雑益等	5	18	84	7	273
教育普及業務費	62	68	87	96	62	臨時利益	-	347	11	2	42
受託業務費	474	484	505	511	616						
減価償却費	400	346	451	490	523						
雑損等	3	3	5	6	2						
臨時損失	20	349	12	2	55						
計	9,471	10,049	9,715	8,910	8,801	計	9,771	10,194	9,855	8,948	8,862
						純利益	300	145	141	38	61
						目的積立金取崩額	4	3	2	6	6
						総利益	304	148	143	44	67

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

人件費の減少は、国家公務員給与特例法等に準拠したことによるものである。

一般管理費の減少は、前年度は消費税納付(189,872千円)であったが、24年度は消費税還付となったことが主な要因である。

調査研究業務費の増加は、収蔵品修理費の増加及び共通経費の費用配分の変更が主な要因である。

受託業務費・受託収入の増加は、東京国立博物館、奈良文化財研究所において新規契約があったことが主な要因である。

運営費交付金収益の減少は、人件費の減少及び次年度への繰越の増加が主な要因である。

臨時損失・臨時利益の増加は、固定資産の除却によるものである。

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
資金支出						資金収入					
業務活動による支出	9,114	9,034	9,254	9,675	8,793	業務活動による収入	11,558	11,894	10,665	10,339	9,964
投資活動による支出	3,595	4,345	7,083	3,983	6,556	運営費交付金による収入	8,771	8,367	8,192	7,941	7,366
財務活動による支出	16	20	7	14	13	展示事業等による収入	2,787	3,527	2,473	2,398	2,598
翌年度への繰越金	3,343	4,158	3,581	5,098	8,462	投資活動による収入	2,020	2,320	5,102	4,850	8,762
						施設費による収入	2,020	2,320	5,102	4,349	8,762
						固定資産売却による収入	0	0	0	0	0
						有価証券の償還等による収入	0	0	0	501	0
						財務活動による収入	0	0	0	0	0
						前年度よりの繰越金	2,490	3,343	4,158	3,581	5,098
計	16,068	17,557	19,925	18,770	23,824	計	16,068	17,557	19,925	18,770	23,824

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

業務活動による支出の減少は、人件費及び消費税支出の減少と23年度は中期目標期間終了に伴う積立金相当額の国庫納付があったことが主な要因である。

投資活動による支出の増加は、京都国立博物館平常展示館建替工事が主な要因である。

財務活動による支出は、リース債務の支払によるものである。

【参考資料2】貸借対照表の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
資産						負債					
流動資産						流動負債					
現金・預金	3,343	4,158	3,581	5,098	8,662	運営費交付金債務	1,350	1,197	0	396	626
未収金	664	601	637	619	2,577	預り施設費	-	0	0	0	0
その他	36	32	526	26	48	預りその他補助金	-	6	0	0	0
固定資産						預り寄附金	152	144	86	192	202
有形固定資産						未払金	1,787	2,448	3,635	4,656	9,705
建物	43,830	42,143	45,582	42,938	55,806	未払費用	51	59	59	72	64
收藏品	97,362	99,521	101,359	102,593	103,779	前受金	1	-	0	2	3
土地	44,411	44,411	44,411	44,411	44,411	預り金	146	229	101	172	347
その他	5,666	6,961	6,383	10,409	4,741	その他流動負債	2	4	5	4	4
無形固定資産						固定負債					
ソフトウェア	116	144	165	142	124	資産見返負債					
電話加入権	5	5	5	4	4	資産見返運営費交付金	2,030	2,038	2,429	2,410	2,538
投資その他資産	1	1	1	5	4	資産見返寄附金	73	106	177	156	127
						資産見返物品受贈額	113	99	90	77	64
						資産見返その他補助金	-	162	174	136	97
						建設仮勘定見返運営費交付金	123	126	143	173	75
						建設仮勘定見返施設費	1,526	2,963	2,383	6,715	1,579
						引当金					
						退職給付引当金	0	0	0	0	13
						その他の固定負債					
						長期未払金	23	39	34	28	25
						負債合計	7,377	9,620	9,316	15,189	15,469
						純資産					
						資本金	104,714	104,714	104,714	104,714	104,714
						資本剰余金	82,324	82,479	87,316	85,651	99,221
						利益剰余金	1,019	1,164	1,304	691	752
						(うち当期未処分利益)	304	148	143	44	67
						純資産合計	188,057	188,357	193,334	191,056	204,687
資産合計	195,434	197,977	202,650	206,245	220,156	負債資本合計	195,434	197,977	202,650	206,245	220,156

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

現金・預金、未収金及び未払金の増加は、京都国立博物館平常展示館建替工事に関連して、文化庁からの施設整備費補助金の未収金の増加及び工事費の支払が次年度となったため、現金・預金及び未払金と同額増加したことが主な要因である。

建物の増加は、京都国立博物館平常展示館が竣工したことが主な要因である。これに関連して固定資産・その他(建設仮勘定)及び建設仮勘定見返施設費がそれぞれ減少している。

運営費交付金債務の増加は、次年度への繰越によるものである。

【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較(過去5年分を記載) (単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
I 当期末処分利益					
当期総利益	304	148	143	44	67
前期繰越欠損金	0	0	0	0	0
II 利益処分額					
積立金	304	148	143	44	6
独立行政法人通則法第44条第3項により					
主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0	61
業務拡充積立金	0	0	0	0	61
施設改修積立金	0	0	0	0	0

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

当期総利益の増加は、自己収入の増加が主な要因である。なお、平成24年度利益処分額のうち業務拡充積立金61百万円については、主務大臣の承認を受けようとする額である。

【参考資料4】人員の増減の経年比較(過去5年分を記載) (単位:人)

職種※	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
定年制研究職員	186	186	186	185	183
任期制研究系職員	7	7	10	5	6
再任用研究職職員	1	2	2	3	3
定年制事務職員	121	123	123	121	122
任期制事務職員	0	0	0	2	2
再任用事務職員	1	1	1	2	2
定年制技能・労務職員	22	20	19	19	19
任期制技能・労務職員	0	0	0	0	0
再任用技能・労務職員	3	3	0	0	0
指定職相当職員	3	3	3	3	3

※職種は法人の特性によって適宜変更すること

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

独立行政法人国立文化財機構の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

<p>【(大項目)1-1】</p>	<p>1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>	<p>【評定】</p> <p style="text-align: center;">A</p>				
		<p>H23</p>	<p>H25</p>	<p>H26</p>	<p>H27</p>	
		<p>A</p>				
<p>【(中項目)1-1】</p>	<p>1 歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整理と、次代への継承</p>	<p>【評定】</p> <p style="text-align: center;">A</p>				
		<p>H23</p>	<p>H25</p>	<p>H26</p>	<p>H27</p>	
		<p>A</p>				
<p>【(小項目)1-1-1】</p>	<p>収蔵品の収集</p>	<p>【評定】</p> <p style="text-align: center;">A</p>				
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。</p> <p>(東京国立博物館)</p> <p>日本を中心にして広くアジア諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p> <p>(京都国立博物館)</p> <p>京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p> <p>(奈良国立博物館)</p> <p>仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p> <p>(九州国立博物館)</p> <p>日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。</p> <p>(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。</p>		<p>H23</p>	<p>H25</p>	<p>H26</p>	<p>H27</p>	
		<p>A</p>				
		<p>実績報告書等 参照箇所</p>				
		<p>・自己点検評価報告書 個別表 p1-p4 1-(1)-1 適時適切な収集 p5-p8 1-(1)-2 寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用</p>				
		<p>・自己点検評価報告書 統計表 p1-p25 1-(1) 収蔵品</p>				
<p>【インプット指標】</p>						
<p>(中期目標期間)</p>	<p>H19</p>	<p>H20</p>	<p>H21</p>	<p>H22</p>	<p>H23</p>	<p>H24</p>
<p>決算額(百万円)</p>	<p>1,737</p>	<p>1,037</p>	<p>1,759</p>	<p>1,863</p>	<p>720</p>	<p>874</p>
<p>従事人員数(人)</p>	<p>98</p>	<p>99</p>	<p>103</p>	<p>105</p>	<p>100</p>	<p>99</p>
<p>※決算額は、4国立博物館の文化財購入費の決算額を計上している。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>						

評価基準	実績	分析・評価																																																																																														
<p>○購入、寄贈、寄託の受け入れにより、各館の特色に沿った体系的・通史的にバランスのとれたコレクションを形成したか。</p>	<p>主な実績 収蔵品 123,378 件、24 年度新収品 576 件(うち 購入 26 件、寄贈 153 件、編入 397 件) ※23 年度新収品 701 件 文化財購入費 8 億 7 千万円 ※23 年度 7 億 2 千万円(1 億 5 千万円増) 寄託品 11,666 件 ※23 年度 11,866 件(200 件減)</p> <p>(参考)収蔵品件数</p> <table border="1" data-bbox="586 402 1666 711"> <thead> <tr> <th rowspan="2">【収蔵品件数】</th> <th colspan="5">過去の実績に関する経年データ</th> <th rowspan="2">24年度</th> </tr> <tr> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>112,439</td> <td>112,529</td> <td>112,776</td> <td>113,258</td> <td>113,897</td> <td>114,362</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>6,386</td> <td>6,417</td> <td>6,526</td> <td>6,584</td> <td>6,621</td> <td>6,708</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>1,794</td> <td>1,805</td> <td>1,812</td> <td>1,827</td> <td>1,831</td> <td>1,834</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>333</td> <td>370</td> <td>397</td> <td>433</td> <td>453</td> <td>474</td> </tr> <tr> <td>4 館合計</td> <td>120,952</td> <td>121,121</td> <td>121,511</td> <td>122,102</td> <td>(*1) 122,802</td> <td>123,378</td> </tr> </tbody> </table> <p>(*1) 23 年度新収品 701 件のうち編入 1 件は東京国立博物館から九州国立博物館への管理換であるため、4 館合計の 23 年度収蔵品数は 22 年度比 700 件増。</p> <p>(参考)寄託品件数</p> <table border="1" data-bbox="586 863 1666 1136"> <thead> <tr> <th rowspan="2">【寄託品件数】</th> <th colspan="5">過去の実績に関する経年データ</th> <th rowspan="2">24年度</th> </tr> <tr> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>2,743</td> <td>2,750</td> <td>2,734</td> <td>2,726</td> <td>2,689</td> <td>2,563</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>6,154</td> <td>5,907</td> <td>5,957</td> <td>6,005</td> <td>6,013</td> <td>5,914</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>2,057</td> <td>2,067</td> <td>1,957</td> <td>1,947</td> <td>1,945</td> <td>1,951</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>1,091</td> <td>1,105</td> <td>1,256</td> <td>1,297</td> <td>1,219</td> <td>1,238</td> </tr> <tr> <td>4 館合計</td> <td>12,045</td> <td>11,829</td> <td>11,904</td> <td>11,975</td> <td>11,866</td> <td>11,666</td> </tr> </tbody> </table> <p>(目標値について) 収蔵品件数については、目標値を定めていない。文化財の購入は、各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見を踏まえて行っている。内外の関係者と連携を図り、迅速かつ的確な情報収集に努めているが、そもそも文化財購入は収集対象として適切な作品が市場に出るかどうかに影響されるため、定量評価になじまない。寄贈についても相手方の意向によるものであり、同様である。寄託品件数は、各館の継続的な努力による所蔵者との良好な関係が前提であるが、最終的には作品をお預けいただく所蔵者の意向により決定するものであり、定量的評価になじまないため、23 年度より目標値を定めていない。</p>	【収蔵品件数】	過去の実績に関する経年データ					24年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	東京国立博物館	112,439	112,529	112,776	113,258	113,897	114,362	京都国立博物館	6,386	6,417	6,526	6,584	6,621	6,708	奈良国立博物館	1,794	1,805	1,812	1,827	1,831	1,834	九州国立博物館	333	370	397	433	453	474	4 館合計	120,952	121,121	121,511	122,102	(*1) 122,802	123,378	【寄託品件数】	過去の実績に関する経年データ					24年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	東京国立博物館	2,743	2,750	2,734	2,726	2,689	2,563	京都国立博物館	6,154	5,907	5,957	6,005	6,013	5,914	奈良国立博物館	2,057	2,067	1,957	1,947	1,945	1,951	九州国立博物館	1,091	1,105	1,256	1,297	1,219	1,238	4 館合計	12,045	11,829	11,904	11,975	11,866	11,666	<p>購入、寄贈、寄託により、各館の特色を生かしたバランスの良いコレクションが形成されていると評価する。</p> <p>特に、学術的に価値が高く、重要な資料も複数収集しており、これらの調査研究や展示等の活動に期待する。</p> <p>また、購入費用の一部に外部資金を導入・活用していることも高く評価できる。</p>
【収蔵品件数】	過去の実績に関する経年データ					24年度																																																																																										
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度																																																																																											
東京国立博物館	112,439	112,529	112,776	113,258	113,897	114,362																																																																																										
京都国立博物館	6,386	6,417	6,526	6,584	6,621	6,708																																																																																										
奈良国立博物館	1,794	1,805	1,812	1,827	1,831	1,834																																																																																										
九州国立博物館	333	370	397	433	453	474																																																																																										
4 館合計	120,952	121,121	121,511	122,102	(*1) 122,802	123,378																																																																																										
【寄託品件数】	過去の実績に関する経年データ					24年度																																																																																										
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度																																																																																											
東京国立博物館	2,743	2,750	2,734	2,726	2,689	2,563																																																																																										
京都国立博物館	6,154	5,907	5,957	6,005	6,013	5,914																																																																																										
奈良国立博物館	2,057	2,067	1,957	1,947	1,945	1,951																																																																																										
九州国立博物館	1,091	1,105	1,256	1,297	1,219	1,238																																																																																										
4 館合計	12,045	11,829	11,904	11,975	11,866	11,666																																																																																										

(参考)法人の自己評価

24年度も展示や研究に活用できる文化財の収集に努め、編入を除き179件の新収品を得た。
(うち購入26件)

主な購入品としては、「葡萄図 没倫紹等筆」(東博、重要美術品)、「土製外容器 天部像陰刻」(京博)、「絹本着色東大寺曼荼羅」(奈良博)、「前田家伝来名物裂帖」(九博)など、各館の特色を活かした効果的な収集を行っており、平常展の活性化や調査研究を行う上で、重要な役割を果たすことが期待される。外部資金の活用については、東京国立博物館での購入5件のうち「蔬菜図」「鶺鴒図」等4件について、購入費用の一部又は全額に用途特定寄附金を充てている。また、京都国立博物館においては、運営費交付金が削減された状況で平常展示館の建替工事関係に優先的に予算を執行せざるを得なかったため、当初の購入予算から大幅に減額しての執行となったが、展示効果が高く研究課題としても重要な考古資料を1件購入することができた。同様に、23年度の東京国立博物館でも、運営費交付金が削減された状況で東洋館の再開館に必要な演示具・備品等の取得や収蔵品の再配置に予算を振り向けざるを得なかったため、購入費の捻出が困難となり、購入件数0件となったところであるが、24年度は前述のとおり回復している。こういった財源の厳しい状況の中でも、陳列品購入については十分な財源の確保に努めたい。

寄贈については、個人収集家等へ積極的な働きかけを行った結果、153件の文化財を新規に寄贈いただくことができた。東京国立博物館の寄贈品「歌川国芳筆通俗水滸伝豪傑百八人之一個」は、代表作74図のうち64図が一括保管される貴重なものである。京都国立博物館の寄贈は86件で、このうち35件が寄託品からの寄贈である。特に、鏡面にまで文様帯を表現する点がきわめて珍しい「重要文化財 変形方格規矩鏡」を含む考古9件の寄贈は、2世代60年にわたる寄託者からの一括寄贈であり、博物館と所蔵者との良好な関係を長期にわたり継続してきた結果と言える。

寄託については、24年度は新規寄託119件、返却319件があり、寄託品総件数は200件減少したが、これは近年、寄託者である社寺等が、自ら収蔵庫・展示施設を整備される事例が増えている中で、継続的寄託及び新規寄託についての努力を継続した結果である。奈良国立博物館の新規寄託品「刺繍阿弥陀如来来迎図」は、絵画でなく刺繍で表した作品で、頭髪を編み込んでおり中世の追善供養の一形式を示す重要な資料である。また、寄託品返却件数には、その後寄贈を受けたものの、購入したものも含まれる。京都国立博物館では返却172件のうち36件を寄贈受入又は購入し、九州国立博物館では返却11件のうち2件が購入の運びとなった。

以上のような購入・寄贈・寄託により、全体としてコレクションの体系的・通史的バランスをより良いものにすることができたと考えている。

次年度以降も国立博物館としてのナショナルセンターの役割に相応しい収集を実施していきたい。

【(小項目)1-1-2】	収蔵品の管理・保存	【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。</p> <p>(2)-2 展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。</p>		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己点検評価報告書 個別表 p9-p12 1-(2)-1 収蔵品の管理・保存 p13-p16 1-(2)-2 施設の環境整備 ・自己点検評価報告書 統計表 p26-p27 1-(2) 収蔵品の管理・保存 			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	148	2,106	2,212	5,094	4,414	10,273
従事人員数(人)	110	109	115	115	111	110

※決算額は、決算報告書・施設整備費補助金の決算額を計上している。(管理・保存にかかる光熱水料や、調査にかかる事務費は個別に計上できないため、勘案していない。)

※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員及び常勤施設系職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
<p>○収蔵品の写真・管理データを蓄積することにより、収蔵品の保存・管理の徹底に努めたか。</p>	<p>(2)-1 収蔵品の管理・保存</p> <p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本格修理等における列品調査時、応急修理時(对症修理時)、列品貸与の点検時に保存カルテを作成し、保存・蓄積した。(各館) ・収蔵品管理システム「列品管理プロトタイプデータベース」に、作品の保存カルテを表示する機能を追加した。(東博) ・保存カルテについては、23年度より文化財の個別写真が添付されたフォームに統一し、保存修理指導室で作成・保管するシステムの運用が軌道に乗ったことで、24年度は127件の保存カルテを順調に作成した。(奈良博) ・平成20年度末から実施している、収蔵品の所在と現状を悉皆的に調査する列品情報整備事業を 	<p>保存カルテの作成が順調に行われており、収蔵品管理システムとの連携も進められていると認められる。</p> <p>今後、九州国立博物館が行っているX線CTスキャナ・3D デジタイザなどの三次元データの取得による保存状況や構造の把握は、収蔵品の保存・管理にとって有効と思慮され、他館での展開も含め、収蔵品の保</p>

継続して実施した。(東博)

- ・寄託制度に関するリーフレットを作成し、3年ごとの寄託継続のお知らせとともに寄託者に送付し、寄託者との良好な信頼関係を維持と、寄託業務に対する理解の増進を図った。(京博)
- ・展示品を中心にX線CTスキャナ・3Dデジタル・三次元プリンタを用いて非接触で三次元データを取得し、保存状況と構造調査を実施した。測定結果は文化財の予防的保存に役立てるとともに展示に反映した。また、保存修復施設1～6を運用し、計画的な保存修理事業を進めた。(九博)

(参考) 保存カルテ作成件数

【保存カルテ 作成件数】	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	(1,725)	(2,693)	(1,989)	(2,368)	(1,641) 1,187	1,594
京都国立博物館	140	174	214	108	249	215
奈良国立博物館	103	108	114	218	130	127
九州国立博物館	252	289	205	101	107	91
4館合計	2,220	3,264	2,522	2,795	1,673	2,027

※()内は、計数方法が異なるため参考数。22年度まで東京国立博物館では、収蔵品及び寄託品に加えて特別展等の借用品における応急修理時の保存カルテ作成成分を含めていたが、23年度より他館と統一のため含めない計数方法とした。

(目標値について)

保存カルテ作成件数については、列品貸与件数の影響が大きく、外的要因に左右され目標値設定になじまないため、23年度より定量的な目標は定めていない。

(参考) 法人の自己評価

24年度保存カルテ作成件数の前年度比は、4館計で354件増、東京国立博物館が407件増である。主な要因は列品貸与件数の増加(東京国立博物館の列品貸与件数:前年度比390件増)であり、列品貸与時、本格修理時、応急修理時のそれぞれで保存カルテ作成は順調に行われている。保存カルテデータの収蔵品管理システムとの連携については、今年度、東京国立博物館でシステム改修を行い、奈良国立博物館では準備を進めた。

東京国立博物館の収蔵品悉皆調査は、列品情報整備事業の本格調査4年目に当たり、順調に進んでいる。

九州国立博物館で使用している科学調査機器については、文化財用のX線CTとして世界的に最も優れた装置の一つとして高く評価されており、得られた調査結果は、展示への活用その他、テレビ放送でも紹介された。また、収蔵品以外についても、九州国立博物館では文化財を外部から借

存管理におけるさらなる展開が期待される。

そのためには、機器類の一層の充実と、それらを扱う専門人材の確保も検討していく必要がある。

耐震補強工事や展示環境整備等、確実に進んでいると評価できる。

また無線 LAN による温湿度管理システム、IPM 防虫対策、LED 照明等の導入により、収蔵庫や展示の安定した環境整備に努めている。

<p>○展示場、収蔵庫の老朽化対策や温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施したか。</p>	<p>用して展示することが多いことから、機器を活用した所蔵者との共同研究が進んでおり、今後の展開が期待される。</p> <p>(2)ー2 施設の環境整備</p> <p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京国立博物館東洋館の工事完了に伴い、収蔵庫及び展示室内に温湿度測定装置の配置、調湿剤の設置などを行い、環境の安定化を図った。(東博) ・京都国立博物館平常展示館建替工事は24年度末に本体工事完了、引き渡しを受けた。(京博) ・東京国立博物館黒田記念館の障がい者用エレベーター、段差解消機及び多目的トイレ設置の改修工事を含めた耐震補強改修及び書庫棟傾き補修等の工事を進めており、25年7月完了を予定している。(東博) ・東京国立博物館表慶館に障がい者用エレベーター及び多目的トイレ設置の改修工事を進めており、25年6月完了を予定している。(東博) ・防災設備等の改修として、収蔵庫ガス消火設備工事、防犯設備工事(センサー・監視カメラ)、発電機設備工事を進めており、25年度末完了を予定している。(奈良博) ・展示室及び展示ケース内の温湿度の管理をすることができる無線LANによるリアルタイムの温湿度管理システムにより、正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示室内の温湿度環境の変化に、科学的データを以て即時に対応した。(奈良博) ・空気環境に関して、収蔵庫及び外気など34地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測し、蓄積した。これらのデータの解析・評価に基づき、平成館特別展示室の温室度環境を改善するための空調時間延長等の実験を実施し、効果を検証した。(東博) ・環境データを解析することで、極めて安定した収蔵庫・展示環境を維持することができた。(九博) ・IPM(総合的有害生物管理)の実施・普及を行った。(各館) <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>耐震補強工事のため閉館していた東京国立博物館東洋館は、展示ケース設置等の展示環境整備を行い、予定通り25年1月2日より開館した。京都国立博物館平常展示館の建替工事は、24年度内に本体工事を完了し、25年度に展示環境整備、26年春に開館の予定である。このほか、東京国立博物館黒田記念館の耐震補強改修工事、奈良国立博物館の防災設備等改修についても着手することができ、地震対策をはじめ各種災害対応について、機構全体として順調に進行している。また、東京国立博物館表慶館のバリアフリー化改修工事については、車椅子での2階展示室観覧が可能になる等、快適な観覧環境の提供、建物の有効活用に繋がるものである。</p> <p>また、各博物館でIPM(総合的有害生物管理)活動の実践として防虫対策に取り組んでおり、無線LANによるリアルタイムの温湿度管理システム導入、空気汚染状況の調査・対策などにより、収蔵庫及び展示室内の環境維持について、万全の体制を図っている。</p>	
---	---	--

【(小項目)1-1-3】	収蔵品修理、保存処理	【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(3)-1 修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。</p> <p>(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。</p> <p>(3)-3 収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う調査・研究のための基本設備の充実に図る。</p>		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>・自己点検評価報告書 個別表 p17-p24 1-(3)-1 収蔵品の修理 p25 1-(3)-2 国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に p26 1-(3)-3 収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討 p590 IV-1 施設・設備に関する計画</p> <p>・自己点検評価報告書 統計表 p28-p50 1-(3) 収蔵品の修理</p>			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	132	126	158	187	140	144
従事人数(人)	50	51	50	50	48	47

※決算額は、文化財修理を外注した決算額を計上している。
 ※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
○緊急性の高い収蔵品等から計画的に修理を実施したか。	<p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画的な文化財の本格修理を実施した。(137件 ※23年度146件) ・文化財修理の適正化を図るため修理契約委員会を 21 年度に設置し、以降も引き続き同委員会を開催し、契約形態の審議を行っている。(各館) ・紙本などの修理技術者として保存修復課に引き続き3名のアソシエイトフェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。作品の劣化予防のために485件の応急修理を実施し、緊急性の高いものから95件の本格修理を実施した。うち国宝1件、重要文化財3件は寄付金による本格修理である。(東博) 	<p>収蔵品の修理は、伝統的修復技術及び科学的な保存技術を活用しながら、計画的に実施され、定量的な目標値を上回っている。</p> <p>寄付金などの外部資金の活用も評価できる。</p> <p>文化財修理所は、計画的な整備が見ら</p>

<p>○文化財保存修理所の整備・充実のための取組を行ったか。</p> <p>○計画的な収蔵スペースの確保が図られたか。</p>	<p>・館費による修理に加えて、外部資金として財団の修理助成による修理を 2 件開始した。また、個人から当館に寄せられた文化財修復のための寄付金による書跡の修理を完了した。(京博)</p> <p>・23年度より施行の本部規程第81号「独立行政法人国立文化財機構文化財保存修理所等の供用及び運営に関する規程」に基づき、文化財保存修理所(京都国立博物館、奈良国立博物館)及び文化財保存修復施設(九州国立博物館)の供用及び運営を行った。また、文化財保存修理所等の整備・充実について引き続き検討した。(京博・奈良博・九博)</p> <p>・東洋館の収蔵庫改修工事の完了に伴い、本館地下特 8 収蔵庫、表慶館 2 階仮収蔵庫等に収納していた東洋関係の文化財を、東洋館の収蔵庫に移動した。(東博)</p> <p>・本館地下特8収蔵庫の棚を改修し、本館 2 階絵画収蔵庫の作品を移動した。(東博)</p> <p>・本館 2 階の旧絵画収蔵庫の棚を改修し、本館特 4 仮収蔵庫から漆工品、本館地下収蔵庫から民族資料を移動し、それらの保管環境を大幅に改善した。また特 4 仮収蔵庫から建築模型を本館地下収蔵庫に移動し、保管環境を改善。特 4 を多様な目的に使用できるようにした。(東博)</p> <p>・建設中の新平常展示館について、空調フィルターの性能を検討した。また環境モニタリングの計測情報を管理サーバーに蓄積し、一元管理するシステムの設計内容を精査した。また、新設するフィルム保管室の温湿度調整機能について 24 時間空調等の検討を行った。(京博)</p> <p>・火災時に収蔵品を毀損する恐れのないガス消火設備(ハロンガス)を収蔵庫・調査室に設置した。(奈良博)</p> <p>【修理件数(本格修理)】指標: 年度計画 ※定量的評価の目標値を設定しているものについては、実績が目標値の1.5倍以上をあげた場合「S」とした。 東京国立博物館</p> <table border="1" data-bbox="571 1037 1680 1165"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>実績</th> <th>定量的評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>40 件以上</td> <td>28 件以上 40 件未満</td> <td>28 件未満</td> <td>95 件</td> <td>S</td> </tr> </tbody> </table> <p>京都国立博物館</p> <table border="1" data-bbox="571 1197 1680 1324"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>実績</th> <th>定量的評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>10 件以上</td> <td>7 件以上 10 件未満</td> <td>7 件未満</td> <td>13 件</td> <td>A</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	実績	定量的評価	40 件以上	28 件以上 40 件未満	28 件未満	95 件	S	A	B	C	実績	定量的評価	10 件以上	7 件以上 10 件未満	7 件未満	13 件	A	<p>れ、科学的な技術を用いた保存環境の整備が進められている。</p> <p>東京国立博物館では、収蔵庫改修に伴い、収蔵空間の確保と作品の移動がなされ、収蔵環境に改善が図られている。</p>
A	B	C	実績	定量的評価																		
40 件以上	28 件以上 40 件未満	28 件未満	95 件	S																		
A	B	C	実績	定量的評価																		
10 件以上	7 件以上 10 件未満	7 件未満	13 件	A																		

奈良国立博物館				
A	B	C	実績	定量的評価
9 件以上	7 件以上 9 件未満	7 件未満	9 件	A
九州国立博物館				
A	B	C	実績	定量的評価
15 件以上	11 件以上 15 件未満	11 件未満	20 件	A

(目標値について)

修理件数(本格修理)の目標値は、各館の長期的な修理計画及び年度計画策定時点で確定している当年度の修理予算等により、設定している。

【修理件数 (本格修理)】	過去の実績に関する経年データ					24年
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年	
東京国立博物館	101	75	106	139	106	95
京都国立博物館	15	17	5	9	10	13
奈良国立博物館	10	8	11	9	11	9
九州国立博物館	22	25	24	19	19	20
4 館合計	148	125	146	176	146	137

(参考)法人の自己評価

定量的な目標を定めている本格修理件数については、4館ともに目標に達しており、本格修理は計画的に実施されている。特に東京国立博物館では、バンク・オブ・アメリカからの寄附金による国宝「檜図屏風」の本格修理等、外部資金による修理を行うことができ、実績件数を大きく伸ばした。

文化財保存修理所については、規程に基づいて供用及び運営を行っており、またその整備・充実に努めた。

収蔵スペースの確保については、館によっては改修工事に伴う物品の移動等もある中、安全性を確保しつつ限られた空間を有効活用しており、各館とも計画的な収蔵スペースの確保に努めている。

【(中項目)1-2】	2 文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

【(小項目)1-2-1】	展示の充実 【法人の達成すべき目標(計画)の概要】 文化財を活用して日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化を国内外へ発信するため、展示、教育活動、広報の充実を図るとともに、政府の観光政策と連動した観光資源としても活用を図る。 (1) 展覧事業の充実 我が国の中核的拠点として、展覧事業については、常に点検・評価を行い国民のニーズ、学術的動向等を踏まえた質の高いものを実施するとともに、展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、国際文化交流に配慮するなど魅力あるものとする。また、見やすさ分かりやすさに配慮した展示及び解説や音声ガイド等の導入を行うことにより、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化についての理解を深めるものとなるよう工夫する。 ①-1 平常展は、展覧事業の中核と位置付け、各国立博物館の特色を十分に発揮した体系的・通史的なものとするとともに、最新の研究成果を基に、日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解の促進に寄与する展示を実施し、国内外からの来館者の増加を図る。なお、京都国立博物館においては、耐震化を図るための平常展示館建て替え終了後、国際文化観光都市・京都において京都文化発信の核となる博物館を目指した平常展を平成26年度までに開催する。 ①-2 展示に関する説明を一層充実させることに努め、作品キャプションについては全てに英語訳を付すとともに、展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等を80%以上設置する。 ② 特別展等については、国内外の博物館と連携した我が国の中核的拠点にふさわしい質の高い展示を行う。また、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、国民の知的好奇心を刺激する展示を実施する。特別展の来館者数については、展示内容・展覧環境を踏まえた目標を設定し、その達成に努める。なお、展覧会来館者の満足度を常に把握し改善を図る。特別展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。 (東京国立博物館)年3～4回程度 (京都国立博物館)年2～3回程度 (奈良国立博物館)年2～3回程度 (九州国立博物館)年2～3回程度 ③ 海外からの要請等に応じて、海外において展覧会等を行うことにより、日本の優れた文化財をもとにした歴史と伝統文化を紹介する。	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		・自己点検評価報告書 個別表 p27-p31 2-(1)-①-1 平常展 p32 2-(1)-①-2 展示説明の充実 p33-p52 2-(1)-② 特別展 p53-p54 2-(1)-③ 海外展 ・自己点検評価報告書 統計表 p51 2-(1)-④ 展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置 p122 共通資料 a-①来館者数推移(入館料別)(過去5ヵ年) p123 共通資料 a-②来館者数推移(展覧会別)(過去5ヵ年) p125 共通資料 a-③入場料収入 p126 共通資料 a-④平常展・特別展・海外展 p227 附属資料 平成24年度平常展・特別展アンケート結果			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	920	894	980	1,086	854	1,770
従事人員数(人)	98	99	103	105	100	99

※決算額は、展覧事業費に要したディスプレイ費・印刷製本費・旅費・謝金・消耗品費等の損益計算書上の費用額を計上している。

※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																																								
<p>○国民のニーズや学術的動向等を踏まえた質の高いものとしたか。また、観覧者の理解が深まるよう展示・解説を工夫したか。</p> <p>(平常展)</p> <p>○展覧事業の中核として、各館の特色を十分に発揮した体系的・通史的な展示としたか。</p> <p>○作品のキャプションについては、すべてに英語訳を付したか。また、海外</p>	<p>主な実績</p> <p>24年度国立博物館来館者数 合計334万7,505人 ※23年度 317万8,414人(約16万9千人、5.3%増)</p> <p>■24年度 博物館の年間総来館者数等</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">総来館者数</th> <th colspan="2">平常展</th> <th colspan="2">特別展・共催展</th> </tr> <tr> <th>来館者数</th> <th>特集陳列件数</th> <th>来館者数</th> <th>開催回数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>1,555,694人</td> <td>416,430人</td> <td>47件</td> <td>1,139,264人</td> <td>9回(2回)</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>234,540人</td> <td>—人</td> <td>—件</td> <td>234,540人</td> <td>5回</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>450,235人</td> <td>145,914人</td> <td>6件</td> <td>304,321人</td> <td>3回</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>1,107,036人</td> <td>460,525人</td> <td>12件</td> <td>646,511人</td> <td>4回</td> </tr> <tr> <td>4博物館 合計</td> <td>3,347,505人</td> <td>1,022,869人</td> <td>65件</td> <td>2,324,636人</td> <td>21回(2回)</td> </tr> </tbody> </table> <p>※来館者数は年度集計(24年4月1日～25年3月31日)であり、複数年度にかかる特別展は、当年度分のみ集計している。</p> <p>※東博平常展来館者数は、黒田記念館を含む。</p> <p>※開催回数の()内は、海外展(東博2回、うち1回は特別協力)で内数。(来館者数は除く。)</p> <p>①平常展(来館者数 102万2,869人) ※23年度 81万3,802人(約20万9千人、25.7%増)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成23年度末に引き続いて東京国立博物館140周年事業を24年度末まで継続し、その一環で、特集陳列として秋の名品特別公開を実施。総合文化展活性化のための特別公開を正月、花見、秋という3回体制とした。(東博) ・耐震改修工事を終えた東洋館を、25年1月にリニューアルオープンした。展示面積を拡大し、「東洋美術をめぐる旅」をコンセプトに、これまで限定公開しかできなかった「クメール(カンボジア)の彫刻」、「インドの細密画」、「アジアの民族文化」等の専用展示コーナーを設けた。また、「映像トラン 		総来館者数	平常展		特別展・共催展		来館者数	特集陳列件数	来館者数	開催回数	東京国立博物館	1,555,694人	416,430人	47件	1,139,264人	9回(2回)	京都国立博物館	234,540人	—人	—件	234,540人	5回	奈良国立博物館	450,235人	145,914人	6件	304,321人	3回	九州国立博物館	1,107,036人	460,525人	12件	646,511人	4回	4博物館 合計	3,347,505人	1,022,869人	65件	2,324,636人	21回(2回)	<p>展覧事業は計画どおり実施された。平常展の入館者数は、各館とも目標入館者数を上回った事は評価できる。</p> <p>平常展会場では小規模な企画展、一時的に預かる仏像等の特別公開、観客動員のため様々な試みがなされ、一定の成果を得た。</p> <p>特に東京国立博物館の平常展充実努力は注目に値し、博物館として本来あるべき姿を目指すものといえる。</p> <p>なお、平常展における外国語の解説パネルは、各館とも目標値である80%以上の設置をしており、またキャプションの4言語化や解説の多言語化も順次整いつつあることを評価するが、さらなる充実が望まれる。</p> <p>なお、外国語(特に英語)での情報発信についてもさらなる充実が望まれる。</p> <p>平常展における陳列替件数、陳列総件数についても、各館とも目標値を達成している。</p> <p>特別展の開催回数は、目標値を達成し、</p>
	総来館者数			平常展		特別展・共催展																																				
		来館者数	特集陳列件数	来館者数	開催回数																																					
東京国立博物館	1,555,694人	416,430人	47件	1,139,264人	9回(2回)																																					
京都国立博物館	234,540人	—人	—件	234,540人	5回																																					
奈良国立博物館	450,235人	145,914人	6件	304,321人	3回																																					
九州国立博物館	1,107,036人	460,525人	12件	646,511人	4回																																					
4博物館 合計	3,347,505人	1,022,869人	65件	2,324,636人	21回(2回)																																					

からの来館者向けに、展示テーマごとに外国語の解説パネル等を80%以上設置したか。

ク」(作品が制作された背景や出土地などを紹介する映像プログラム)の展示室への設置、TNM&TOPPANミュージアムシアターを地下に新設するなど、展示作品への理解を映像によって補助し、展示ケース・照明の改良や、アジアの占い体験コーナーを設置するなど、親しみやすい東洋館を実現した。(東博)

- ・黒田記念館を耐震改修のため閉館した。(東博)
- ・平常展示館建替工事にともない、平常展示を休止した。そのため、館外での収蔵品の公開に努めるとともに、貸出作品の情報をウェブサイトで公開した。(京博)
- ・所蔵者である寺院において仏堂の改修、建替等を行う際、堂内に安置されている仏像を当館で保管する機会を利用し、特別公開「金剛寺 降三世明王坐像」(23.10.24～25.3.31)、特別公開「定朝様の丈六阿弥陀像」(24.6.26～25.3.31)を実施した。(奈良博)
- ・トピック展示「江戸の粋、印籠 フィンランド・クレスコレクション」(関連9室 24.12.19～25.3.10)など、独創的な着想に基づいたトピック展示・特別公開を12回開催し、新鮮な展示を提供することができた。(九博)

【平常展来館者数】指標: 年度計画(22年度末の大震災の影響を勘案し、前中期計画期間の年度平均の確保を目指す)
東京国立博物館(362,470人)

A	B	C	実績	定量的評価
362,470人以上	253,729人以上 362,470人未満	253,729人未満	416,430人	A

京都国立博物館(—)

A	B	C	実績	定量的評価
—	—	—	—	—

奈良国立博物館(118,032人)

A	B	C	実績	定量的評価
118,032人以上	82,623人以上 118,032人未満	82,623人未満	145,914人	A

九州国立博物館(380,690人)

A	B	C	実績	定量的評価
380,690人以上	266,483人以上 380,690人未満	266,483人未満	460,525人	A

入館者数も各館合計で目標入館者数を上回っている。

地方公共団体との共同調査の成果に基づく「大出雲展」、奈良とその周辺の地道な文化財調査を踏まえた「解脱上人貞慶」、来館者の満足度と学術的意義の高い「頼朝と重源」展が開催されるなど、大型の企画展と学術的価値の高い企画がバランスよく実施され、国民のニーズと学術的動向をふまえた多岐にわたる充実した展示が実施されたことは評価できる。

また、来館者アンケートの結果の分析に基づき、Google Art Projectの参加、スマートフォンによるガイドアプリ、託児所サービスなど、新機種の導入による見やすさ分かりやすさなど、来館者へのサービスの向上の取り組みが見られた。

海外展は、先方からの招聘を誘うような工夫が欲しい。その意味でウェブデータベースやデジタルミュージアムの充実には大いに期待する。

(目標値について)

平常展来館者数は、22年度まで目標値を定めていなかったが、23年度より前中期計画期間の年度平均の確保を目標としている。京都国立博物館では平常展を休止しているため、目標値を設定していない。

【平常展来館者数】	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	334,297	412,675	330,536	373,068	324,597	416,430
京都国立博物館	165,080	141,965	—	—	—	—
奈良国立博物館	131,336	112,849	136,672	71,566	130,839	145,914
九州国立博物館	341,282	241,423	544,661	274,545	358,366	460,525
4館合計	971,995	908,912	1,011,869	719,179	813,802	1,022,869

※東京国立博物館平常展来館者数は、23年度より黒田記念館を含む。

【平常展 陳列替件数】指標: 年度計画

東京国立博物館(4,500件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
4,500件以上	3,150件以上 4,500件未満	3,150件未満	6,989件	S

京都国立博物館(—)

A	B	C	実績	定量的評価
—	—	—	—	—

奈良国立博物館(400件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
400件以上	280件以上 400件未満	280件未満	465件	A

九州国立博物館(1,100件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
1,100件以上	770件以上 1,100件未満	770件未満	1,195件	A

(目標値について)

平常展陳列替件数は、各館毎に当年度の平常展展示計画に基づき目標値を設定している。東京国立博物館における目標値増は、25年1月開館の東洋館における展示を見込んだものである。京都国立博物館では平常展を休止しているため、目標値を設定していない。

・東京国立博物館陳列替件数 24年度目標値:4,500件(23年度目標値:4,000件、前年度比500件増)

【平常展 陳列替件数】(件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	(319)	(319)	(316)	(290)	4,914	6,989
京都国立博物館	(53)	(39)	—	—	—	—
奈良国立博物館	(21)	(12)	(8)	(101)	481	465
九州国立博物館	(375)	(386)	(431)	(334)	1,373	1,195

※ ()内は、計数方法が異なるため参考数

【平常展 陳列総件数】指標:年度計画

東京国立博物館(6,500件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
6,500件以上	4,550件以上 6,500件未満	4,550件未満	9,190件	A

京都国立博物館(—)

A	B	C	実績	定量的評価
—	—	—	—	—

奈良国立博物館(700件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
700件以上	490件以上 700件未満	490件未満	814件	A

九州国立博物館(1,700件程度)

A	B	C	実績	定量的評価
1,700件以上	1,190件以上 1,700件未満	1,190件未満	2,416件	A

(目標値について)

平常展陳列総件数は、各館毎に当年度の平常展展示計画に基づき目標値を設定している。東京国立博物館における目標値増は、25年1月開館の東洋館における展示を見込んだものである。京都国立博物館では平常展を休止しているため、目標値を設定していない。

・東京国立博物館陳列総件数 24年度目標値:6,500件

(23年度目標値:5,500件、前年度比1,000件増)

【平常展 陳列総数】 (件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	10,223	7,172	6,601	5,610	7,394	9,190
京都国立博物館	1,611	1,081	—	—	—	—
奈良国立博物館	928	605	717	340	1,092	814
九州国立博物館	2,012	3,146	2,106	1,668	2,417	2,416

【平常展外国語パネルの設置率】指標:中期計画

東京国立博物館(80%以上)

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上 80%未満	56%未満	97%	A

京都国立博物館(一)

A	B	C	実績	定量的評価
—	—	—	—	—

奈良国立博物館(80%以上)

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上 80%未満	56%未満	100%	A

九州国立博物館(80%以上)

A	B	C	実績	定量的評価
80%以上	56%以上 80%未満	56%未満	87%	A

(目標値について)

平常展外国語パネルの設置率は、中期計画にて目標値を設定している。京都国立博物館では平常展を休止しているため、目標値を設定していない。

【外国語パネルの設置率】	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	95%	97%	97%	96%	96%	97%
京都国立博物館	100%	100%	—	—	—	—

奈良国立博物館	56%	77%	91%	84%	89%	100%
九州国立博物館	63%	82%	82%	83%	94%	87%

(特別展)

○我が国の博物館の中核的拠点にふさわしい質の高い展示としたか。また、個々の展覧会ごとに、展示内容・観覧環境を踏まえた目標入館者数を定め、それを達成したか。さらに展覧会来館者の満足度を把握し、改善を図ったか。

- ・東京国立博物館 3～4回
- ・京都国立博物館 2～3回
- ・奈良国立博物館 2～3回
- ・九州国立博物館 2～3回

②特別展(来館者数 232万4,636人) ※23年度 236万4,612人(約4万人、1.7%減)

【特別展 開催回数】指標: 中期計画

※定量的評価の目標値に幅を持たせて設定している場合の定量評価は、AかBかの判定及びBかCかの判定については目標値幅の下限を使用し、SかAかの判定については目標値幅の上限を使用している。例えば、目標値2～3回の場合の判定は、実績値1回:C、2回:A、3回:A、4回:A、5回:S となる。

東京国立博物館(3～4回)

A	B	C	実績	定量的評価
3回以上	—	3回未満	9回	S

京都国立博物館(2～3回)

A	B	C	実績	定量的評価
2回以上	—	2回未満	5回	S

奈良国立博物館(2～3回)

A	B	C	実績	定量的評価
2回以上	—	2回未満	3回	A

九州国立博物館(2～3回)

A	B	C	実績	定量的評価
2回以上	—	2回未満	4回	A

※海外展を含む。

(目標値について)

特別展開催回数は、中期計画にて目標値を設定している。

【特別展 開催回数】(回)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	5(1)	8(1)	12(4)	10(6)	7(1)	9(2)
京都国立博物館	3	3	5(1)	5(1)	6(2)	5
奈良国立博物館	3	4	3	4	3	3
九州国立博物館	4	4	4	5(1)	5(1)	4
4館合計	15(1)	19(1)	24(5)	24(8)	21(4)	21(2)

※()内は海外展で、内数。

【特別展 来館者数】指標:年度計画

東京国立博物館(目標合計:102万人)

東京国立博物館140周年 特別展「ボストン美術館 日本美術の至宝」(24.3.20～6.10 73日間)

A	B	C	実績	定量的評価
310,000人以上	217,000人以上 310,000人未満	217,000人未満	540,382人	S

日中国交正常化40周年 特別展「中国山水画の20世紀 中国美術館名品選」(24.7.31～8.26 25日間)

A	B	C	実績	定量的評価
40,000人以上	28,000人以上 40,000人未満	28,000人未満	18,415人	C

日中国交正常化40周年 東京国立博物館140周年 生誕100年記念 特別展「青山杉雨の眼と書」(24.7.18～9.9 48日間)

A	B	C	実績	定量的評価
80,000人以上	56,000人以上 80,000人未満	56,000人未満	51,327人	C

東京国立博物館140周年 古事記1300年・出雲大社大遷宮 特別展「出雲—聖地の至宝—」(24.10.10～11.25 41日間)

A	B	C	実績	定量的評価
55,000人以上	38,500人以上 55,000人未満	38,500人未満	137,646人	S

日中国交正常化40周年 東京国立博物館140周年 特別展「中国 王朝の至宝」(24.10.10～12.24 66日間)

A	B	C	実績	定量的評価
250,000人以上	175,000人以上 250,000人未満	175,000人未満	141,507人	C

東京国立博物館140周年 特別展「飛驒の円空—千光寺とその周辺の足跡—」(25.1.12～4.7 74日間)

A	B	C	実績	定量的評価
100,000人以上	70,000人以上 100,000人未満	70,000人未満	190,122人	S

日中国交正常化40周年・東京国立博物館140周年 特別展「書聖 王羲之」(25.1.22～3.3 36日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
185,000人以上	129,500人以上 185,000人未満	129,500人未満	152,523人	B
京都国立博物館(目標合計:12万人)				
特別展覧会「王朝文化の華 -陽明文庫名宝展-」(24.4.17～5.27 37日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
30,000人以上	21,000人以上 30,000人未満	21,000人未満	101,006人	S
特別展覧会「古事記1300年 出雲大社大遷宮 大出雲展」(24.7.28～9.9 38日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人未満	79,218人	S
特別展覧会「宸翰 天皇の書 -御手(みて)が織りなす至高の美-」(10.13～11.25 38日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
20,000人以上	14,000人以上 20,000人未満	14,000人未満	24,699人	A
特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」(25.1.8～2.11 31日間) 特集陳列「成立800年記念 方丈記」(25.1.8～2.11 31日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
20,000人以上	14,000人以上 20,000人未満	14,000人未満	25,216人	A
奈良国立博物館(目標合計:26万人)				
御遠忌800年記念特別展「解脱上人貞慶 -鎌倉仏教の本流-」(24.4.7～5.27 45日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人未満	24,317人	B
特別展「頼朝と重源 -東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆-」(24.7.21～9.17 52日間)				
A	B	C	実績	定量的評価
50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人未満	41,985人	B

(海外展) ○海外において展覧会を開催し、日本の歴史と伝統文化を紹介したか。	特別展「第64回正倉院展」(24.10.27～11.12 17日間)				
	A	B	C	実績	定量的評価
	180,000人以上	126,000人以上 180,000人未満	126,000人未満	238,019人	A
	九州国立博物館(目標合計:27万人)				
	特別展「平山郁夫 シルクロードの軌跡」(24.4.3～5.27 49日間)				
	A	B	C	実績	定量的評価
	50,000人以上	35,000人以上 50,000人未満	35,000人未満	110,047人	S
	特別展「美のワンダーランド 十五人の京絵師」(24.7.10～9.2 49日間)				
	A	B	C	実績	定量的評価
	60,000人以上	42,000人以上 60,000人未満	42,000人未満	75,415人	A
	特別展「ベルリン国立美術館展 ー学べるヨーロッパ美術の400年ー」(24.10.9～12.2 51日間)				
	A	B	C	実績	定量的評価
	100,000人以上	70,000人以上 100,000人未満	70,000人未満	224,324人	S
	特別展「ボストン美術館 日本美術の至宝」(25.1.1～3.17 66日間)				
	A	B	C	実績	定量的評価
	60,000人以上	42,000人以上 60,000人未満	42,000人未満	236,725人	S
	(目標値について) 特別展来館者数の目標値については、各館とも、開催日数、開催時期、展示会場、展覧会名称、展示品分野、出品作品、共催者、その他要因を総合的に勘案して、特別展ごとに設定している。 ③海外展 2件 ※総来館者数に含めない(開催回数に含む) ・海外展「仏教美術と宮廷の美」(24.2.17～4.8 51日間 会場:米国・ヒューストン美術館) 主催:東京国立博物館、ヒューストン美術館 来館者数:18,629人				

・海外展「天下一の翡翠色を持つ青磁」(24.10.16～12.16 56日間 会場:韓国国立中央博物館)
主催:韓国国立中央博物館
特別協力:東京国立博物館
来館者数:43,800人

(参考)法人の自己評価

24年度における国立博物館への総来館者数は、334万7,505人を数え、前年度比約16万9千人増(5.3%増)であった。

(平常展)

平常展来館者数については、23年度は東日本大震災の影響を受け、特に東京国立博物館平常展(総合文化展)の上半期来館者数に影響が見られたが、24年度は4館合計の平常展来館者数が3年ぶりに百万人の大台を超えて102万2,869人となり、前年度比約20万9千人増(25.7%増)となった。閉館中の京都国立博物館を除き、各館とも目標値を達成することができた。東京国立博物館では、陳列替件数と陳列総件数は東洋館開館を見込んだ目標値としていたが、目標達成率が陳列替件数155%(定量評価S判定)、陳列総件数141%(定量評価A判定)となった。この要因は、東京国立博物館140周年の特集陳列を本館等にて、当初の予定を上回って多数行ったため、特集陳列実施件数は、24年度47件(23年度32件、前年度比11件増)であった。

平常展の内容については、東京国立博物館東洋館が耐震補強工事を終えて25年1月2日にリニューアルオープンした。従来仮収蔵庫として利用していた地下1階のスペースを展示室として整備し展示面積を増やしたことで、新しい展示コーナーを開設した他、展示ケースのガラスとして、背後の照明の映り込みがほとんどなく鑑賞の妨げとならないよう反射率が低く、かつ透過率の高い特殊なガラスの採用や、LED光源による効果的な展示照明など、展示方法を一新し、充実した展示内容と展示環境により、好評を博した。この他、奈良国立博物館における社寺の改修等によりお預かりしている仏像の特別公開や、九州国立博物館におけるトピック展示など、各館の特色を生かした展示を行っている。各館それぞれが多様な研究成果を基に、国立博物館として質・量ともに十分な展示を行っている。京都国立博物館は、平常展示館建替工事に伴い平常展を休止しているが、平成26年春の開館に向け、作業は順調に進んでいる。

また外国語パネルの設置についても、英語については各館とも目標(80%以上)を達成しており、また全作品のキャプションに外国語を付している。更に、中国語・韓国語についても、東京国立博物館東洋館キャプションの4言語化(日本語・英語・中国語・韓国語)や、九州国立博物館で一部作品に中国語の作品解説を付すなど、順次整いつつあり、多言語による対応に努めている。

(特別展)

特別展開催回数については、4館とも目標回数を上回り、国民のニーズに応じた、また各館の特色を生かしつつ学術的意義の高い特別展を多数開催した。特に東京国立博物館では、平成館での年4回の特別展に加えて、今回の機会を逃すと開催が難しかった「円空展」など、本館特別5室を会場とした小規模な特別展を3回、海外展を2回開催し、計9回の開催となった。

特別展来館者数については、巡回展「ボストン美術館展」が東京国立博物館で約54万人(うち24年度約48万7千人)及び九州国立博物館で約23万7千人、九州国立博物館の「ベルリン国立美術館展」が約22万4千人、奈良国立博物館の「第64回正倉院展」が約23万8千人など、多数の来館者を集めた特別展があった。

一方で、東京国立博物館で3本の特別展が、来館者数定量評価がC(達成率70%未満)となった。このうち特に、特別展「中国 王朝の至宝」(24.10.10～12.24)の来館者数が141,507人(目標値25万人、達成率56.6%)であった要因として、開幕直前の9月頃から日中間の政治的緊張が高まり、本展に対する来館者の興味をそぐこととなったと考えられる。東京国立博物館では日中国交正常化40周年を記念して中国美術を紹介する特別展を複数開催しており、その中心となる特別展の一つが、国際情勢の影響を受けた形となった。しかしながら、このような時期にこそ、海外の文化を学術的・客観的に伝える場が必要であり、互いの文化を知る機会として、展覧会の位置付けはますます重要なものとなったと認識している。国立博物館の責務として、今後も国内外の文化交流を意識した展覧会を進めていきたい。

京都国立博物館の「大出雲展」は、同館と島根県が共同で、十分な時間をかけて行った社寺文化財調査の成果を反映することができ、約8万人の来館者数につながった。

奈良国立博物館では、来館者数では正倉院展が最多であるが、奈良及び周辺地域の社寺における文化財調査の成果を反映した特別展「解脱上人貞慶」、特別展「頼朝と重源」は、学術的意義が注目に値するとともに、来館者満足度も各81%、88%と高いものであった。今後も南都諸社寺との連携を深め、調査研究を進めたい。

九州国立博物館では、ボストン美術館が誇る日本美術の優品の数々をコレクション形成の歴史とともに紹介した「ボストン美術館展」や、九州初の本格的な西洋美術展となった「ベルリン国立美術館展」などに、目標を超える多くの来館者が訪れ、また来館者満足度も各89%、83%と高く、地域のニーズに応じた展覧会を開催できたと考ええる。

(海外展)

海外展は、米国・ヒューストン美術館と韓国国立中央博物館において、計2本開催した。このうちヒューストン美術館では、日本美術の常設展示室が新たに開室することとなり、それを記念して、東京国立博物館所蔵品の宮廷の美術及び仏教美術の優品を紹介する展覧会を実施した。出品作品の一部は展覧会終了後も長期貸与を行っており、同館日本室が、米国で日本文化を紹介する拠点の一つとなるよう、今後も協力を継続していきたい。

(来館者分析・事業への反映の状況)

博物館の来館者数については、館別、展覧会区分(平常展、特別展)別、観覧者区分別等の各種統計によって推移データを把握するとともに、アンケートの実施により来館者の傾向・満足度等について調査を行い、各館の展示企画・事業運営の参考としている。

展示の充実についての評価は来館者数を含めた様々な要素から判断されるものだが、平常展の魅力を高めつつ、再来館者の増加を図るため、展示館のリニューアル、特集陳列の実施など魅力ある陳列計画に努めるとともに、「博物館に初もうで」「博物館でお花見を」やコンサートなど各種イベントを多数実施してきたところである。また、友の会・パスポート会員の確保により、再来館者の増加を図るとともに博物館の活動事業への理解が増進されることを目指している。

分析結果を事業へ反映した例として、東京国立博物館では、平成 18～20 年度に実施した平常展来館者意識調査及び非来館者調査の結果・分析を基に、情報発信・ブランド再定義等を中心とした各種方策の検討・実施を継続している。24 年度は、ブログによる情報発信の継続、Google Art Project への参加(24 年 4 月)、スマートフォンによるガイドアプリの提供(24 年 4 月正式運用開始)、託児サービスの開始(25 年 1～2 月試行)、ミュージアムショップのリニューアル(25 年 3 月)などに反映した。

【(小項目)1-2-2】 教育活動の充実	【評定】																								
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>日本及びアジア諸地域の歴史・伝統文化の理解促進に寄与するよう、機構の人的資源・物的資源・情報資源を活用した教育活動を実施する。</p> <p>①学校、社会教育関係団体、国内外の博物館等と連携協力しながら、講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の学習機会を提供する。また、参加者数についてはその都度、目標を設定する。</p> <p>②教育活動の充実に寄与するようボランティアを支援する。また、企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図る。</p> <p>③大学との連携事業、各種セミナー、インターンシップ等の実施を通じて人材育成に寄与する。</p>	A																								
	H23	H25	H26	H27																					
	A																								
	実績報告書等 参照箇所																								
	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検評価報告書 個別表 p55-p64 2-(2)-① 学習機会の提供 p65-p68 2-(2)-②-1 ボランティア活動の支援 p69-p72 2-(2)-②-2 博物館支援者の増加 p73-p76 2-(2)-③ 大学との連携 ・自己点検評価報告書 統計表 p52-p84 2-(2) 教育活動の充実 																								
<p>【インプット指標】</p> <table border="1" data-bbox="123 750 1400 925"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>70</td> <td>62</td> <td>74</td> <td>89</td> <td>96</td> <td>64</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>52</td> <td>53</td> <td>52</td> <td>54</td> <td>51</td> <td>49</td> </tr> </tbody> </table> <p>※決算額は、決算報告書・教育普及事業費の決算額を計上している。</p> <p>※従事人員数は東京国立博物館の学芸企画部博物館教育課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>	(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24	決算額(百万円)	70	62	74	89	96	64	従事人員数(人)	52	53	52	54	51	49				
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24																			
決算額(百万円)	70	62	74	89	96	64																			
従事人員数(人)	52	53	52	54	51	49																			
<p>評価基準</p> <p>○講演会、作品解説、スクールプログラム、ワークショップ等の目標参加者数を達成したか。</p>	<p>実績</p> <p>主な実績</p> <p>①学習機会の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演会、ギャラリートーク等については、各館の年間展示予定に沿ったテーマを設定し、実施した。(4館) ・スクールプログラムを実施し、児童生徒に対し目的、学年、人数などに応じたプログラムを提供した。(東博) ・平常展示館建替工事に伴う講堂閉鎖のため、外部施設を借りて土曜講座・夏期講座を実施し、学習機会の提供を継続した。(京博) ・小中学生向けのギャラリートーク「少年少女博物館くらぶ」を、本年も特別展「大出雲展」にて実施した。(京博) 			<p>分析・評価</p> <p>講演会やギャラリートーク等、各館においてさまざまな活動が行われており、国民が文化財に触れる機会を提供している。</p> <p>なお、講堂が建替中の京都国立博物館による他施設で催した講演会や、奈良国立博物館における「貞慶フォーラム」「正倉院学術シンポジウム」等、近隣の寺社や他機関との連携による館外の催しに、多くの来場者を迎えることができた。</p>																					

- ・特別展「解脱上人貞慶」に関連して「解脱上人 貞慶フォーラム」を実施した。(奈良博)
- ・正倉院展に関連したシンポジウムは「正倉院学術シンポジウム2012 正倉院の近代～壬申検査から140年～」と題して24年11月4日に実施し、4人のパネラーにより基調講演と討論を行った。170人の参加を得、満足度は81%であった。(奈良博)
- ・特別展「平山郁夫」展では、日本画家を講師に招き、平山氏も訪れた太宰府天満宮をスケッチする、ワークショップ「みんなのスケッチ体験教室」を行った。(九博)
- ・教育普及ゾーン(体験型展示室「あじっば」)で活用する様々な教育キットの開発を行った。(九博)

【講演会、ギャラリートークの参加者数】指標:年度計画

東京国立博物館(7,830人)

A	B	C	実績	定量的評価
7,830人以上	5,481人以上 7,830人未満	5,481人未満	13,193人	S

京都国立博物館(2,380人)

A	B	C	実績	定量的評価
2,380人以上	1,666人以上 2,380人未満	1,666人未満	3,150人	A

奈良国立博物館(2,600人)

A	B	C	実績	定量的評価
2,600人以上	1,820人以上 2,600人未満	1,820人未満	3,454人	A

九州国立博物館(3,100人)

A	B	C	実績	定量的評価
3,100人以上	2,170人以上 3,100人未満	2,170人未満	8,354人	S

(目標値について)

講演会、ギャラリートークの参加者数については、当年度の特別展、平常展の展示計画に基づき、講演会・ギャラリートーク等の計画をたてて目標値を設定している。

22年度まで(第2期中期計画期間まで)は、前中期計画期間の年度平均を目標値としていたが、23年度より(第3期中期計画期間より)、年度計画において定めることとした。この理由としては、講演会の多くが特別展の関連事業であり、各年の特別展の回数やテーマの影響を大きく受けること、また、改修工事等による平常展の長期休止等の影響を受けることから、年度によって適正

講演会、ギャラリートークの参加者数は、各館とも目標値及び前年度数を上回ったことは評価できる。なお、目標値の設定は妥当であると認められる。

ボランティアについては、展示解説以外にも活躍の場を拡げ、さまざまな場面で対応できるように研修が実施されている。各館ごとに特色あるボランティアへの支援を行っているとは評価できる。

賛助会、友の会、パスポートなどの加入件数も概ね順調に推移しているが、なお一層の理解と支援を得るべく、魅力的な働きかけを期待する。

大学との連携事業により、大学では実施の難しい文化財に則した人材育成に貢献している。また、学生を受け入れることでインターンシップに具体的な成果を残しており、今後の継続が望まれる

な目標値が変動するためである。特に京都国立博物館では、平成20年度からの平常展示館建替工事に伴う講堂閉鎖により、外部の会場を借用して講演会を実施しているため、物理的に「前中期目標期間の年間平均実績」を上回ることが困難な状況となっていた。

24年度の講演会、ギャラリートークの参加者数の目標値の設定は、以下のとおりである。

・東京国立博物館 24年度目標値：7,830人(23年度目標値7,830人、前年度比0)

内訳：講演会3,500人、・列品解説等4,000人、連続講座250人、公開講座80人

・京都国立博物館 24年度目標値：2,380人(23年度目標値：2,238人、前年度比142人増)

内訳：土曜講座2,000人、夏期講座190人、「京都ミュージアムズ・フォー連携講座190人

目標値142人増の要因は、土曜講座の実施予定回数増によるものである。

・奈良国立博物館 24年度目標値：2,600人(23年度目標値：2,450人、前年度比150人増)

内訳：特別展等講座1,500人、夏季講座500人、サンデートーク600人

目標値150人増の要因は、夏季講座の参加者数目標値を、24年度500人としたことによる

(23年度350人)。これは近年の実績値(23年度実績522人、22年度実績556人)を踏まえたも

のである。

・九州国立博物館 24年度目標値：3,100人(23年度目標値：2,030人、前年度比1,070人増)

内訳：特別展記念講演会600人、講演及びシンポジウム1,300人、ミュージアムトーク1,200人

目標値 1,070 人増の要因は、これまで目標値の算出の際は含めていなかった、各種講演・

シンポジウム等についても含めることとしたためである。

【講演会、ギャラリートークの参加者数】(人)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	11,361	12,332	12,546	13,319	12,664	13,193
京都国立博物館	4,489	3,413	3,002	2,313	1,450	3,150
奈良国立博物館	2,949	3,655	3,421	3,349	3,006	3,454
九州国立博物館	4,168	5,507	6,806	3,996	7,833	8,354
4館合計	22,967	24,907	25,775	22,977	24,953	28,151

(参考)キャンパスメンバーズ加入校数

【キャンパスメンバーズ加入校数】(件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	22	29	35	35	37	38
京都国立博物館	21	29	30	29	30	30
奈良国立博物館	20	25	27	28	28	27
九州国立博物館	21	22	29	27	28	24
4館合	84	105	121	119	123	119

<p>○ボランティアを支援したか。また、企業との連携や友の会活動の活性化等により博物館支援者の増加を図ったか。</p>	<p>(目標値について)</p> <p>キャンパスメンバーズ加入校数については、大学等への周知活動等、各館における努力の結果であるが、最終的な実績値は、加入する側(学校等)の判断によるものであり、定量的評価になじまないため、目標値を設定していない。</p> <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>定量的な目標として掲げた講演会等参加者数は、4館とも目標に達した。京都国立博物館においては平常展示館講堂が建替工事のため、土曜講座・夏期講座の継続開催が危ぶまれていたが、学習機会の継続的な提供を続けるため、外部の施設を借りて実施し、参加者数についても目標を達成することができた。講座・講演会等はリピーターの参加も多く、毎年継続して実施することが、参加者増にもつながっている。</p> <p>教育普及事業については、各館ともこれまでの事業を継続的に実施し、児童・生徒のみならず大学生や一般も対象とした事業を実施し、学習の機会の提供を図っている。</p> <p>②-1 ボランティア活動の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア向け研修の実施、自己学習の奨励をした。(4館) ・館内各所での案内・みどりのライオン体験コーナー・紹介コーナー、東洋館オアシスでの活動、職場体験の補助のほか、イベント・ワークショップ・バリアフリー対応班による、年間を通した各種イベント・ワークショップ・バリアフリー対応の補助活動を実施した。また、各活動実施のための研修会・解説会を実施した。(東博) ・「文化財ソムリエ」として登録している大学生・大学院生のボランティアが、当館研究員によるスクーリングを受けた後、京都市内の小中学校訪問授業において講師を務めた。(京博) ・ボランティアの新制度発足に伴い新たにボランティアを公募し、書類選考、面接等を経て126人(24年4月時点。25年3月末現在の登録数は121人)を採用し、世界遺産グループ、解説グループ、サポートグループの3つに分かれて4月から活動を始めた。奈良市教育委員会との連携により、世界遺産学習として奈良市の35校の小学5年生(2,428人)を受け入れた。受け入れるに当たって、担当ボランティア(世界遺産グループ)の解説指導と誘導のトレーニングを実施した。(奈良博) ・第3期ボランティアを中心とした主体的な活動を重視することによって、活動意欲の向上、活動の活性化・充実、そして市民視点の活動の創造等が行われた。(九博) 	
---	--	--

(参考)ボランティア数:

【ボランティア数】(人)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	162	171	163	159	169	170
京都国立博物館	23	30	35	40	64	45
奈良国立博物館	96	102	98	85	87	121
九州国立博物館	293	388	345	288	355	308
4館合計	574	691	641	572	675	644

(目標値について)

ボランティア数は、募集時にある程度の定員数を想定はするものの、ボランティア人数が博物館のサービスと比例するものではない。重要なのは活動の内容であって、多ければよいというものではなく、人数による定量的評価になじまないため、目標値を設定していない。

(参考)法人の自己評価

ボランティアについては、各館において研修や自己学習の機会を提供するとともに、ボランティアにとっても充実した活動となるよう各館とも協力して事業を実施している。なかでも奈良国立博物館においては、23年度にボランティア制度の見直しと「ボランティア室」設置を行ってきたもので、24年4月より新たな制度でのボランティア活動を開始した。

②-2 博物館支援者の増加

- ・「友の会」「パスポート」等の会員制度を継続し、リピーターの拡大に努めた。(4館)
- ・「賛助会」会員制度を継続し、企業へのPR活動を積極的に行い、新規会員の増加に努めた。(東博・奈良博)
- ・支援団体(社団法人清風会)が行う鑑賞会(4回)・見学会(5回)・会報(4回)の解説・執筆及び、総会の開催に協力した。また、地域・機関との連携事業に協力した。(京博)
- ・特別展「ポストン美術館 日本美術の至宝」において、三菱商事株式会社と共催で「障がい者内覧会」を実施した。(東博)
- ・全館休館期間中に、ROSSO × ROSSO 実行委員会が主催、京博が共催で「古代青銅鏡とフェラーリF1 美の競演」を開催し、大盛況であった。(京博)
- ・観光関連業界と連携して、奈良の観光イベント「ムジークフェストなら2012」、「ライトアッププロムナード・なら2012」、「なら燈花会」、「ならファンタジア YAMATO 新話」、「なら瑠璃絵」に協力し、顧客層の開拓を行った。(奈良博)
- ・支援団体や近隣地域と連携したイベントを実施し、広報活動の充実を図った。(九博)

(参考) 賛助会等加入件数

【賛助会等加入件数】 (件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	163	196	218	235	292	332
京都国立博物館	390	388	389	391	373	353
奈良国立博物館	45	49	56	64	65	68
3館合計	598	633	663	691	732	765

(目標値について)

賛助会等加入件数は、各館における周知活動等の努力の結果であるが、最終的な実績値は、加入する側(個人・団体)の判断によるものであり、定量的評価になじまないため、目標値を設定していない。

(参考) 友の会・パスポート加入者数

【友の会・パスポート加入者数】(人)		過去の実績に関する経年データ					24年度
		19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	友の会	1,341	1,913	2,085	1,412	1,802	1,570
	パスポート	16,035	20,405	21,598	13,733	17,672	16,569
	小計	17,376	22,318	23,683	15,145	19,474	18,139
京都国立博物館	パスポート ※	3,224	2,932	2,612	2,468	2,667	3,064
奈良国立博物館	パスポート ※	2,439	2,815	2,799	3,180	2,615	2,486
九州国立博物館	友の会	167	154	206	144	117	196
	パスポート	3,252	3,120	3,914	3,318	3,093	4,224
	小計	3,419	3,274	4,120	3,462	3,210	4,420
4館合計		26,458	31,339	33,214	24,255	27,966	28,109

※機構内で統一するため、京都国立博物館では24年4月より、奈良国立博物館では24年1月より、「友の会」から「パスポート」へ名称変更した。(会費・特典等に変更無し)

(目標値について)

友の会・パスポート加入件数は、各館における周知活動等の努力の結果であるが、最終的な実績値は、加入する側(来館者)の判断によるものであることに加え、加入した会員が継続的に来館して初めてリピーターを確保したと言えるものであることから、定量的評価になじまないため、目

<p>○大学との連携事業等を実施したか。</p>	<p>標値を設定していない。友の会・パスポートによる来館者数は、平常展の有料来館者数の内数としてカウントしているが、平常展来館者数全体での目標値を設定していることから、目標値を設定していない。</p> <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>博物館支援者の増加については、賛助会や寄附金などは経済情勢に伴い厳しくなっている中、企業等への個別訪問による賛助会参加企業増加や、特別展への協力金獲得など、各館で企業等への積極的なアプローチに取り組んでおり、昨年以上の実績を上げている。</p> <p>③大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館学芸員を目指す学生の学習意欲の喚起及び高い職業意識の育成を目的として、大学院生を対象にインターンシップを募集し、17 大学 23 名を受け入れた。それぞれ学芸研究部・学芸企画部の 10 部署で 10～30 日間の活動を行った。(東博) ・東京芸術大学の学生ボランティアを募集し、ギャラリートーク班 5 名、制作工程模型班 1 名が活動した。ギャラリートーク班では大学院生と当館研究員が連携して準備を行い、総合文化展の解説を行った。制作工程模型班では館蔵の国宝「紅白芙蓉図」の制作工程模型の展示・教育普及事業(ギャラリートーク・ワークショップ)を行った。(東博) ・京都大学大学院人間・環境学研究科の歴史文化社会論講座では、研究員 6 人が客員教授(4 人)、准教授(2 人)を担当し、博士前期・後期課程の学生に対して、実作品の展示・調査活動を通じた専門的な教育を行った。(京博) ・平成 25 年 1 月 27 日(日)、奈良市教育センター及びなら 100 年会館を会場として、「第3回世界遺産学習全国サミット in なら」を文部科学省・奈良市教育委員会・奈良教育大学等と共同で開催し、学芸部長らによる世界遺産学習リレートーク「次の世代を担う子どもたちへ」及び子供達による世界遺産学習発表会を行った。(奈良博) ・博物館実習生の受け入れを実施し、15大学21人(男3人、女18人)、計10日間受け入れた。(九博) <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>大学との連携については、東京国立博物館における東京芸術大学学生ボランティアや、京都国立博物館における京都大学大学院での授業の担当、奈良国立博物館における奈良教育大学等との共同事業「第3回世界遺産学習全国サミット in 奈良」の開催、九州国立博物館における博物館実習生受け入れ等、各館とも近隣の大学等との連携事業を継続して実施した。インターンシップについては、東京国立博物館では 17 大学 23 名、奈良国立博物館で 1 大学 3 名、九州国立博物館で 5 大学 8 名の学生を受け入れた。</p>	
--------------------------	--	--

【(小項目)1-2-3】 快適な観覧環境の提供 **【評定】**

A

【法人の達成すべき目標(計画)の概要】

国民に親しまれる施設を目指し、来館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。

- ①施設のバリアフリー化、各種案内の充実、研修等の実施等を通じて、高齢者、障がい者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境の提供を行う。
- ②一般来館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施する。調査結果から来館者のニーズを把握し、観覧料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行う。また、施設の収容力に応じた来館者数を確保するとともに、混雑時の対応を含め利用者に配慮した運営を行う。
- ③ミュージアムショップやレストラン等のサービスについては利用者の意見を収集し、改善する。

H23	H25	H26	H27
A			

実績報告書等 参照箇所

- ・自己点検評価報告書 個別表
p77-p82 2-(3)-① 施設・設備等の充実
p65 2-(2)-②-1 ボランティア活動の支援
p83-p86 2-(3)-② 来館者満足度調査及び利用者に配慮した運営
p87-p90 2-(3)-③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実
p590 IV-1 施設・設備に関する計画
- ・自己点検評価報告書 統計表
p85 2-(3) 快適な観覧環境の提供
p227 附属資料 平成24年度平常展・特別展アンケート結果

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	13	25	15	33	18	22
従事人員数(人)	90	85	88	85	85	86

※決算額は、平常展に要するチラシ・パンフレット等の作成にかかる決算額を計上している。

※従事人員数は東京国立博物館の総務部及び京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館の各総務課の常勤事務職員の人数を計上している。その際、役員及び学芸系職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
○高齢者、障がい者、外国人等の利用に配慮した観覧環境の提供を行ったか。	主な実績 ・施設のバリアフリー化として、黒田記念館の障がい者用エレベーター、段差解消機及び多目的トイレ設置の改修工事を進めており、25年7月完了を予定している。また、表慶館に障がい者用エレベーター及び多目的トイレ設置の改修工事を進めており、25年6月完了を予定している。(東博) ・建替中の平常展示館において施設のバリアフリー化を実現すべく検討を進めた。(京博)	施設のバリアフリー化をはじめとして、障がい者、外国人など多様な観客に対応する努力を継続していると評価できる。また、多言語案内表示や託児サービスなどのソフト面での工夫も感じられる。

<p>○利用者のニーズを踏まえ、観覧料金や開館時間の弾力化などの管理運営の改善を行ったか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の一環として、触知図やコミュニケーションボード等を用いたバリアフリー活動を行い、スクールプログラムでの盲学校を含む視覚障害者対応、点字パンフレットの印刷、手話通訳付きのガイドを実施した。(東博) ・身体の不自由な方のために、貸出用の杖を 20 本購入し、貸出に供した。(九博) ・正倉院展の会期中に、託児所を開設し、多くの利用者があった。(奈良博) ・託児サービスを試行した。(25 年 1 月～2 月、9 回) (東博) ・多言語(6～7カ国語)による案内パンフレットの製作・配布を行った。(4館) ・東洋館のリニューアルオープンに際し、案内・誘導サイン・注意事項等を4カ国語(日・英・中・韓)により整備した。(東博) ・トピック展示等で図録に英語を逐語訳で付し、海外の来館者に対応した。(九博) <p>・来館者のニーズを引き出すため、平常展及び各特別展において来館者アンケートを実施し、その結果を観覧環境改善に活かした。(4館)</p> <p>・混雑が予想される展覧会ではその対応を想定した計画を行い、実際の混雑に対しては、収容力に応じた入場者数の調整、陳列品の配置及び音声ガイドの解説場所の工夫等を行い、展覧会場の快適な環境維持に努めた。(4館)</p> <p>・「中国王朝の至宝展」にて手荷物検査による安全保持等を行った。(東博)</p> <p>・小学校・中学校・高等学校の教員、ミュージアムぐるっとパス関西加盟館の職員及びキャンパスメンバーズ加盟校の学生へモニターを委嘱し、提言を受けた。館内で情報を共有し、展覧会を含めた博物館運営に反映した。(京博)</p> <p>・平成22年度末から23年度にかけて実証実験を行なったスマートフォン端末を用いた館内ガイドをもとに、個人の端末にダウンロード可能な Android 版スマートフォンアプリ「トーハクナビ」を24年4月に公開した。さらに、25年1月には AR(拡張現実感)技術を利用した演劇仕立てのコースガイド、蒔絵や陶磁などの制作工程や絵巻の扱い方、屏風の表裏などを手元で体験できる体験型コンテンツを目玉とした本館2階のコースガイドを追加するバージョンアップを行った。バージョンアップ版公開に合わせて25年1月22日～3月3日の期間、端末の貸出サービスを実施した。また、既に iOS 対応として日本語版が公開されダウンロード可能となっていた法隆寺宝物館30分ナビの英語版を25年2月、新たに公開した。(東博)</p>	<p>今後はさらに、直接手に取ることができ るレプリカの製作等視覚障害者への触れ る博物資料構想や、高齢者や障害者のた めの優先入場日の設置といった展開を期 待する。</p> <p>東京国立博物館におけるスマートフォン を用いた館内ガイドの試行は、その拡充と ともに他館における実施を期待したい。</p> <p>ミュージアム・ショップ及びレストランは、 アンケート結果を踏まえた新メニューやグ ッズの開発など、利用者のニーズを踏まえた サービス向上に努めていると認められる。</p> <p>東京国立博物館のミュージアムショップ のリニューアルでは、新しいショップの提案 が試みられ、ナショナルセンターとして先 導的役割を果たした。しかしながらミュー ジアムショップやレストランの規模と質、 また東京国立博物館にたどり着くまでの 環境は海外の大英博物館、ルーブル美 術館などと比べて見劣りする。</p> <p>ミュージアムショップの商品は、インター ネット販売など、観覧者へのサービスの 向上に向けた更なる取組を期待したい。</p>
<p>○利用者の意見を踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等のサービスを改善したか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ミュージアムショップは、本館地下から 1 階 20 室への移転と大規模改装を行い、25 年 3 月にリニューアルオープンした。(東博) ・25 年 1 月の東洋館リニューアルオープンに合わせ、東洋館ショップをリニューアルオープンした。(東博) ・140 周年を記念して、グッズを新規に製作し、販売した。(東博) ・レストラン利用者にアンケート調査を実施し、アンケートの集計結果をレストラン外部委託業者に 	

提示し、さらなる接客サービスの向上に努めた。(京博)

(参考)法人の自己評価

施設のバリアフリー化は一定の水準に達しているが、我が国を代表する施設として多様な来館者に対応すべく検討・工夫を継続しており、建物の改修、設備の充実、多様な来館者を想定したサービスなど、ハード・ソフト両面において改善を重ねている。24年度は特に、懸案であった東京国立博物館の表慶館及び黒田記念館のバリアフリー化工事に着工することができた。外国人対応としては、25年1月リニューアルオープンの東洋館において、館内表示を4言語化(日本語・英語・中国語・韓国語)するなど、着実に整備を進めている。

また、混雑が予想される展覧会では、収容力に応じた会場配置や音声ガイド対象作品の選定など、あらかじめ対応を想定して計画を行っているが、想定を超える来館者数があった場合は、入場規制を行わざるを得ない。混雑時の入場待ち行列の対策としては、混雑情報のウェブ配信や最寄駅での掲出、休憩場所の増設、冬季の防寒対策、夏季の日傘貸出、テント設置、給水所の設置など、来館者の負担軽減のための可能な限りの工夫を各館とも行っている。

ミュージアムショップ及びレストランについては、新たなグッズの開発や、特別展ごとにその趣に合わせた新メニューを提供したほか、レストラン利用者へのアンケート調査を実施するなど、さらなる接客サービス改善に努めた。東京国立博物館ミュージアムショップの本館地下から1階20室への移転は、来館者にとって観覧後お帰りの際の導線として自然に立ち寄れる場所への移転であり、また開放的となった店内配置と合わせ、利用者のニーズを適切に反映したものである。

【(小項目)1-2-4】

文化財情報の発信と広報の充実

【法人の達成すべき目標(計画)の概要】

- ①収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、データ整備及びデジタル化を推進する。
また、整備したデータを公開するウェブサイトなどの公開システムの充実を行う。公開データの件数は継続的に増加させる。収蔵品等に関するデジタル化件数は、その都度目標を設定する。
- ②美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積するとともに、情報の発信と、レファレンス機能を充実させる。
- ③展示や教育事業等について、個々の企画の目的、対象、内容、学術的な意義を踏まえて広報計画を策定し、情報提供を行う。
- ④広報印刷物やウェブサイト等の自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、積極的な広報を行う。
- ⑤ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。

【評定】

A

H23	H25	H26	H27
-----	-----	-----	-----

A			
---	--	--	--

実績報告書等 参照箇所

- ・自己点検評価報告書 個別表
p91-p94 2-(4)-① デジタル化の推進
p95-p98 2-(4)-② 博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化
p99-p103 2-(4)-③ 広報計画の策定と情報提供
p104-p108 2-(4)-④ 広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動
p109-p112 2-(4)-⑤ ウェブサイトのアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る
- ・自己点検評価報告書 統計表
p86-p100 2-(4) 文化財情報の発信と広報の充実
p226 共通資料 d ウェブサイトアクセス件数

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額①(百万円)	19	27	53	21	81	33
決算額②(百万円)	-	-	542	142	-	-
従事人員数(人)	65	67	64	65	64	63

※決算額①は、H18～H22はデジタルアーカイブ化にかかる撮影費・データ入力費の決算額を計上、H23はこれに広報経費を加えた決算額を計上している。

※決算額②は、文化芸術情報電子化推進費補助金にかかる決算額を計上している。

※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課、学芸企画部博物館情報課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の人数を計上している。

評価基準	実績	分析・評価										
<p>○収蔵品等に関するデジタル化目標件数を定め、それを達成したか。また、公開データ件数を増加させたか。</p>	<p>主な実績</p> <p>①デジタル化の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国宝・重要文化財の高精細画像(e国宝)を継続して公開した。(4館) ・22年度より提供している iOS アプリ「e 国宝」に加え、Android アプリ版を開発し、公開した。(25年2月)(4館) ・既存フィルムはほぼ全てデジタル化済みであり、24年度新規フィルム撮影のほぼ全てに当たる776枚をデジタル化した。(東博) ・重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」にて平成21年度より公開している6か国語(日本語、英語、韓国語、スペイン語、フランス語、中国語)による解説について、内容及び表示方法等について修正を行った。(京博) ・仏教美術資料研究センターのウェブサイトを運営し、蔵書、論文データの更新を行い内容の充実に努めた。利用案内パンフレットを更新し、建物見学の際に配布するなどして施設の普及を図った。(奈良博) ・23年度から開始した九州国立博物館内に設置の収蔵品デジタルアーカイブ公開について、利便性を向上するため当該機器の性能を高めた。また、今年度新たに11件の収蔵品情報と、昨年度掲載分収蔵品の1件の画像として新たに750枚のデジタル画像の追加を行った。(九博) ・データ整備及びデジタル化を引き続き推進した。また画像管理システムを改善するとともに、公開データを随時更新・追加した。(東博) ・収蔵品データベースで公開する画像は昨年度より検索できる件数を201点増加させた。(京博) ・公開データを4,326件(昨年度は2,104件)追加更新した。(奈良博) ・九州国立博物館収蔵品デジタルアーカイブの公開データを増加した。(新規追加作品11件、写真追加作品1件)(九博) <p>【収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数】指標:年度計画 東京国立博物館(1,000件)</p> <table border="1" data-bbox="577 1297 1673 1422"> <thead> <tr> <th data-bbox="577 1297 792 1340">A</th> <th data-bbox="792 1297 1016 1340">B</th> <th data-bbox="1016 1297 1240 1340">C</th> <th data-bbox="1240 1297 1464 1340">実績</th> <th data-bbox="1464 1297 1673 1340">定量的評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="577 1340 792 1422">1,000件以上</td> <td data-bbox="792 1340 1016 1422">700件以上 1,000件未満</td> <td data-bbox="1016 1340 1240 1422">700件未満</td> <td data-bbox="1240 1340 1464 1422">776件(ほぼすべて完了)</td> <td data-bbox="1464 1340 1673 1422">B(A)</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	実績	定量的評価	1,000件以上	700件以上 1,000件未満	700件未満	776件(ほぼすべて完了)	B(A)	<p>収蔵品のデジタル化作業は順調に進展している。3D撮影を含む画像撮影数であることを考えると、合計で9000件を越える数は驚異的と言える。これらのデジタル画像をデータベースとして公開することにより、Webアクセス数はさらに増大することが期待される。</p> <p>デジタル化の目標件数は、東京国立博物館以外は達成しており、4館合計では、目標値の140%である。東京博物館の場合、776件の実績で既存分のデジタル化がほぼ完了したということながら、目標設定が1000件以上という不整合については、基準の設定を検討すべきである。</p> <p>博物館情報(収蔵品、出品作品等)のデータ化を進めるとともに、関連情報のデータ整備によりレファランス機能の充実が図られていると評価できる。データ整備の目標件数は、京都国立博物館以外は達成しており、4館合計では目標値の204%である。</p> <p>広報活動に関しては、キャンペーンポスターやパンフレットなどの印刷物の他、ウェブサイトの活用、プロモーション動画のYouTube 公開や地下鉄車内公告放映、e 国宝の Android 版アプリ公開、マスメディアとの連携強化など、多角的で積極的な取組は評価できる。さらに効果につながるような</p>
A	B	C	実績	定量的評価								
1,000件以上	700件以上 1,000件未満	700件未満	776件(ほぼすべて完了)	B(A)								

京都国立博物館(2,000件)					<p>試みについて、検討してほしい。</p> <p>展覧会情報を提供するウェブサイトへのアクセス数は、確実に増加の一途をたどっている。今後も最も有力な情報伝達的手段として、さらなる取組が必要とされる。</p>																																							
A	B	C	実績	定量的評価																																								
2,000件以上	1,400件以上 2,000件未満	1,400件未満	2,732件	A																																								
奈良国立博物館(3,000件)																																												
A	B	C	実績	定量的評価																																								
3,000件以上	2,100件以上 3,000件未満	2,100件未満	4,924件	S																																								
九州国立博物館(1,000件)																																												
A	B	C	実績	定量的評価																																								
1,000件以上	700件以上 1,000件未満	700件未満	1,450件	A																																								
<p>(目標値について)</p> <p>収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数の目標値については、各館が保管する既存フィルム等のうちデジタル化がどこまで完了しているかの進捗に応じた中長期的な計画に基づき、各年度のデジタル化予算にて実施可能な件数を算出し、設定している。</p> <p>24年度目標値は、京博、奈良博、九博の3館は23年度に同じであるが、東京国立博物館では、30万枚を超える保管フィルムのほぼ全てについてデジタル化が完了しているため、当年度の新規撮影件数の目標値3,000件のうちフィルム撮影分1,000件を当年度内にデジタル化することとし、当項目の目標値とした。</p> <p>・東京国立博物館 24年度目標値:1,000件(23年度目標値:3,000件)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">【収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数】 (件)</th> <th colspan="5">過去の実績に関する経年データ</th> <th rowspan="2">24年度</th> </tr> <tr> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立博物館</td> <td>124,996</td> <td>139,000</td> <td>775,300</td> <td>8,639</td> <td>1,468</td> <td>776</td> </tr> <tr> <td>京都国立博物館</td> <td>(8,047)</td> <td>(6,478)</td> <td>(5,603)</td> <td>(4,594)</td> <td>2,165</td> <td>2,732</td> </tr> <tr> <td>奈良国立博物館</td> <td>695</td> <td>1,410</td> <td>90,555</td> <td>4,311</td> <td>5,297</td> <td>4,924</td> </tr> <tr> <td>九州国立博物館</td> <td>(3,295)</td> <td>(3,963)</td> <td>(3,574)</td> <td>1,391</td> <td>2,146</td> <td>1,450</td> </tr> </tbody> </table> <p>※ ()内は、計数方法が異なるため参考数</p>						【収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数】 (件)	過去の実績に関する経年データ					24年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	東京国立博物館	124,996	139,000	775,300	8,639	1,468	776	京都国立博物館	(8,047)	(6,478)	(5,603)	(4,594)	2,165	2,732	奈良国立博物館	695	1,410	90,555	4,311	5,297	4,924	九州国立博物館	(3,295)	(3,963)	(3,574)	1,391	2,146
【収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化件数】 (件)	過去の実績に関する経年データ						24年度																																					
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度																																							
東京国立博物館	124,996	139,000	775,300	8,639	1,468	776																																						
京都国立博物館	(8,047)	(6,478)	(5,603)	(4,594)	2,165	2,732																																						
奈良国立博物館	695	1,410	90,555	4,311	5,297	4,924																																						
九州国立博物館	(3,295)	(3,963)	(3,574)	1,391	2,146	1,450																																						

○情報資料を収集し、レファレンス機能を充実させたか。

(参考)法人の自己評価

収蔵品等の写真フィルムのデジタル化は、各館とも順調に実施されている。京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館については目標値以上の実績があった。東京国立博物館については、実績 776 件(目標 1,000 件、達成率 77.6%)は目標に達しなかったが、これは撮影自体のデジタル撮影への移行が予定以上に早まった結果、そもそもデジタル化が必要な既存フィルム数が少ない状況となったためであり、収蔵品等に関するデジタル化は実質的にほぼ達成されていることから、定量的評価欄には「B(A)」と記載している。また、公開データの件数は、4 館とも順調に増加させることができた。

②博物館関係資料の収集及び発信、レファレンス機能の強化

- ・収蔵品・出品作品等の新規撮影を行い、関連データを整備した。(4館)
- ・資料館において漢籍を中心とした 13000 冊を超える遡及入力及び開架図書の充実と配置換を行い、さらにライブラリーニュースなどによる情報発信や、特別展会場における関連図書リストの配布など資料館の認知度を高める活動を行った結果、資料館利用者数は前年度にくらべ大幅に増加した。(24 年度 4,828 人、23 年度 3,385 人、前年度比 142.6%)。また、所蔵資料の紹介を含む「東京国立博物館資料館案内 2012」を作成した。(東博)
- ・デジタルカメラ等撮影機材の導入を進め、デジタル撮影に移行を開始した。(京博)
- ・館蔵ガラス乾板の保存整理作業を開始し、デジタル保存のためのスキャナ及び周辺機器の導入を進めた。(京博)
- ・仏教美術資料研究センターの工事完了を受けて、新しい平面プランと利便性に配慮した資料の配置を行い、一部の資料の移動を実施した。通常の施設・資料公開にとどまらず、アーカイブズ学、建築学関係の専門家の見学・研修の受け入れを複数回行った。(奈良博)

【収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数】指標：年度計画

東京国立博物館(3,000 件)

A	B	C	実績	定量的評価
3,000件以上	2,100件以上 3,000件未満	2,100件未満	9,556件	S

京都国立博物館(3,000 件)

A	B	C	実績	定量的評価
3,000件以上	2,100件以上 3,000件未満	2,100件未満	2,713件	B

奈良国立博物館(3,000件)				
A	B	C	実績	定量的評価
3,000件以上	2,100件以上 3,000件未満	2,100件未満	4,960件	S
九州国立博物館(500件)				
A	B	C	実績	定量的評価
500件以上	2,100件以上 500件未満	2,100件未満	2,142件	S

(目標値について)

収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数の目標値は、各館とも当年度の撮影計画に基づいて年度計画にて設定している。24年度目標値は、計9,500件(東博3,000件、京博3,000件、奈良博3,000件、九博500件)と設定した。なお、フィルム撮影とデジタル撮影とがあるが、それらの合計を目標値としてしている。

【収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備件数】(件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	3,642	4,721	16,567	11,343	10,566	9,566
京都国立博物館	4,256	6,478	3,753	3,379	3,580	2,713
奈良国立博物館	3,240	6,457	5,818	11,684	6,103	4,960
九州国立博物館	(12,556)	(6,633)	(4,686)	1,393	4,441	2,142

※ ()内は、計数方法が異なるため参考数

(参考)法人の自己評価

情報資料の収集については、各館とも収蔵品・出品作品等の新規撮影及び関連データ整備を行い、東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館については目標値以上の実績があった。京都国立博物館では、実績2,713件(目標3,000件、達成率90.4%)は、目標値達していないが、達成率が90%を超えていることと、デジタル撮影用機材を導入しデジタル撮影への移行を進めていること、ガラス乾板の保存整理作業を開始したことなどから、全体として順調である。近年はフィルム撮影からデジタル撮影への移行が急速に進んでおり、文化財撮影の現場も、新しい機材の導入など、ここ数年は過渡期にある。また、レファレンス機能の充実についても、積極的な取り組みを行っている。東京国立博物館資料館では、23年度に行った有料来館者向け導線の整備を受け、有料来館者を意識したサービスとして、同館ウェブサイトのプリントアウトサービスを開始し、大幅な利用者増となった。23年8月にリニューアルオープンした奈良国立博物館仏教美術資料研究

<p>○計画的な広報・情報提供を行ったか。</p> <p>○積極的な広報活動に努めたか。</p>	<p>センターにおいては、24 年度に案内パンフレットの更新や建物内設置の解説パネル追加など、情報提供サービスの拡充に引き続き努めている。</p> <p>③広報計画の策定と情報提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京国立博物館 140 周年「ブンカのちからにありがとう」及び「東洋館リニューアルオープン」のキャンペーンを行った。(東博) ・「東洋館リニューアルオープン」ならびに「博物館に初もうで」のキャンペーンポスターに、俳優の井浦新氏を起用した。井浦氏には、開館記念式典への出席、同時期開催特別展「飛驒の円空」でのトークショー出演も依頼し、広報とイベントの相乗効果による来館者増を狙った。(東博) ・ドラマ仕立てのショートフィルム形式による「東洋館リニューアルオープン」プロモーション動画を作成し、館のサイト、ならびに YouTube で公開し、東京メトロの車内広告枠でも放映を行った。(東博) ・年間スケジュールリーフレットの制作・配布を行った。(京博) ・奈良市観光協会への入会をはじめ、積極的に地元観光業界に対し広報活動を展開するとともに情報収集に努めた。(奈良博) ・1,000万人達成記念セレモニーにおいて太宰府観光協会と連携した広報活動を実施した。また、トピック展示ポスター掲示、展示・イベントスケジュールチラシの設置など観光協会と連携した広報活動を実施した。(九博) ・九州観光推進機構を通じ海外のメディアに博物館の紹介を行った。(九博) <p>④広報印刷物、ウェブサイト等の活用及びマスメディアとの連携強化等による積極的な広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・140 周年ブンカのちからにありがとうキャンペーンに伴う「140 周年ありがとうブログ」を更新し、計 140 名のスタッフによる感謝の思いを発信した。(更新数 111 回)(東博) ・研究員による鑑賞ガイドやタイムリーなニュースを掲載する 1089 ブログ(更新数 184 回)に加え、140 周年ブンカのちからにありがとうキャンペーンに伴う「140 周年ありがとうブログ」を設置し、計 140 名のスタッフによる感謝の思いを発信した。(更新数 114 回)(東博) ・「博物館にお花見を」において、FM ラジオ局 J-WAVE とのタイアップによる J-WAVE SPRING FESTIVAL@トーハクを開催した。(24 年 4 月 7 日)(東博) ・京都市内 4 館(京都国立博物館、京都国立近代美術館、京都府文化博物館、京都市美術館)の連携協力の提携を結び、共通の展覧会情報パンフレットを作成・配布した。(京博) ・年間を通じて文化財の魅力を紹介する新聞連載や、テレビ番組「奈良国立博物館 仏教美術の殿堂」の放映の他、各特別展等の開催に合わせて、マスコミ媒体や公共交通機関等と連携した広報活動を展開した。(奈良博) ・マスコミや公共交通機関等と連携し、新聞紙上での作品の解説や西鉄電車での車内吊り広告等の広報活動を行った。(九博) 	
--	--	--

<p>○ウェブサイトアクセス件数の向上を図ったか。</p>	<p>・『週刊 一度は行きたい世界の博物館』第 47 号(朝日新聞出版)に、九州国立博物館が登場した。(24 年 6 月 28 日発売)九博の収蔵品の中から選りすぐりの名品を紹介し、書店をはじめ 1 階ミュージアムショップでも発売した。(九博)</p> <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>広報については、東京国立博物館 140 周年事業(24 年 1 月～25 年 3 月)の一環として 24 年度も広報キャンペーンを実施し、俳優井浦新氏を起用したポスターが毎日広告デザイン賞準部門賞を受賞するなど、認知度が大きく向上した。また、九州国立博物館において昨年度に引き続き、テレビCMを制作・放映し動画投稿サイト YouTube でも配信するなど、多角的な広報を実践している。また、各館とも地元の地域団体とタイアップした広報活動を展開しており、積極的な取り組みを継続して行っている。</p> <p>⑤ウェブサイトアクセス件数のカウントの統一を図り、アクセス件数の向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・23 年度より、アクセス件数のカウントをユーザーセッション数に統一した。(4 館) ・アクセス件数の向上を図るため、ウェブサイトの内容の充実を図った。(4 館) ・「投票」「ユリノキひろば」などユーザ参加型のコンテンツ並びにブログのアクセス数増加を目指した、トップページのリニューアルを実施した。(東博) ・グローバルな情報発信を目指し、海外からのアクセス件数向上を図るために、Google Art Project、Google Street View に参加し、館を代表する所蔵作品の高解像度画像と、本館、法隆寺宝物館建物内のストリートビューを公開した。(24 年 4 月)(東博) ・展覧会スケジュールのページを刷新し、利便性を高めた。(京博) ・混雑状況発信のページを一般に普及しているツイッターに切り替え、来館者サービスとセキュリティ向上を図った。(京博) ・従来のウェブサイトでは、日本語・英語版の切り替えがトップページからしかできなかったのを改良し、どのページからでも日本語・英語版に切り替えられるようにし、外国人のアクセス・使用に便宜を図った。(奈良博) ・より多くの方に関心を持ってもらえるよう、特別展「美のワンダーランド」、「ベルリン国立美術館展」、トピック展示「茶の湯を楽しむ V ー 芦屋釜と館蔵茶道具ー」等で、ウェブサイトにて研究員が展覧会の解説を行う動画を YouTube で配信した。また、制作したトピック展示のCMを YouTube で配信した。(九博) 	
-------------------------------	---	--

(参考)ウェブサイトアクセス件数(ユーザーセッション数):

【ウェブサイト アクセス件数】 (ユーザーセッション数)(件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306	2,772,633	2,982,729
京都国立博物館	(733,885)	(1,409,634)	(848,486)	2,077,562	1,835,640	1,837,113
奈良国立博物館	(1402,834)	(1,230,774)	639,030	769,293	722,249	845,202
九州国立博物館	1,164,425	1,480,341	1,956,287	1,384,701	1,150,408	2,078,279

※ ()内は、計数方法が異なるため参考数

(目標値について)

ウェブサイトアクセス件数は、23年度より目標値を設定していない。22年度までは、前中期計画期間の年度平均実績を目標値としていたが、インターネット環境や関連技術の進歩や世代交代が速いため、前中期計画期間との比較がほぼ意味をなさないこと、また、23年度からアクセス件数の単位をユーザーセッション数に統一したため、第2期中期計画期間と第3期中期計画期間とで、実績値の単位がそもそも異なる施設があることから、目標値を設定していない。

(参考)法人の自己評価

ウェブサイトについては、アクセス件数向上を目指し、4館とも内容の充実及び積極的な情報提供に努めた。また、外部のウェブサービスである Google Art Project に、東京国立博物館が参加した。同プロジェクトは、世界の有名美術館が参加するネット上の仮想ミュージアムである。国内外の知名度向上のみならず、日本文化の世界への発信として、大きな一歩となることを期待したい。

ウェブサイトのアクセス件数は、23年度より全施設においてユーザーセッション数に統一して集計・記載を行っている。また、「e国宝」については、PC向けのウェブサイトに加え、スマートフォンアプリを提供している。これまで、22年度のiPhone版、23年度のiPad対応とTwitter連携など、対応する環境を広げ、機能強化してきた。そして24年度はAndroid版をリリースし、主なスマートフォン環境はひととおり対応することができた。これらスマートフォンアプリ「e 国宝」からの利用も、ウェブサイトアクセス件数に含まれている。このように、急速に進化する各種の情報関連環境への対応により、文化財情報の発信の充実に努めている。

【(中項目)1-3】	3 我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

【(小項目)1-3-1】	調査研究成果の発信 【法人の達成すべき目標(計画)の概要】 博物館の中核として我が国における博物館の先導的役割を果たすとともに、海外の博物館とも積極的に交流を図り、国内外の博物館活動全体の活性化に寄与するため、以下の事業を実施する。 (1) 収蔵品等に関する調査・研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧会に関わる刊行物などで発表するとともに、こうした刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を行う。	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		・自己点検評価報告書 個別表 p113-p116 3-(1) 調査研究の成果の発信 ・自己点検評価報告書 統計表 p179- 共通資料 c-③ 学会、研究会等発表実績一覧 p195- 共通資料 c-④ シンポジウム開催実績一覧 p197- 共通資料 c-⑤ 論文等発表実績一覧 p215- 共通資料 c-⑥ 調査研究刊行物一覧			

【インプット指標】						
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	24	28	33	32	23	28
従事人数(人)	98	99	103	105	100	99
※決算額は、紀要等の調査研究にかかる印刷物作成の決算額を計上している。 ※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。						

評価基準	実績	分析・評価
<p>○各種刊行物等で調査・研究の成果を広く公表したか。また、各種刊行物の電子書籍化、インターネットでの公開を行ったか。</p>	<p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究誌『MUSEUM』637～642号、『東京国立博物館紀要』48号、『東京国立博物館図版目録 インド・インドネシア染織篇』、『法隆寺献納宝物特別調査概報XXXIII聖徳太子絵伝(四幅本)1』を刊行した。(東博) ・研究紀要『学叢』第34号を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分を順次ウェブサイトで公開した。(京博) ・研究紀要『鹿園雑集』は、24年度内に刊行し、ウェブサイトにて公開した。(奈良博) ・研究紀要『東風西声』第8号を刊行した。(九博) ・東京国立博物館情報アーカイブの運用を継続し、収蔵品、調査研究成果等の情報公開の充実を図った。(東博) ・特集陳列リーフレット4件のPDFファイル版を作成し、刊行物の電子書籍化及びインターネットでの公開を進めた。(東博) <p>(参考)法人の自己評価</p> <p>収蔵品等に関する調査研究成果の発信として、各館の研究誌・研究紀要である『MUSEUM』(東博)、『東京国立博物館紀要』(東博)、『学叢』(京博)、『鹿園雑集』(奈良博)、『東風西声』(九博)などを刊行した。奈良国立博物館の『鹿園雑集』は、23年度刊行予定であった13号を、24年度に刊行した。インターネットにおける研究成果の公開についても、東京国立博物館情報アーカイブの継続的な運用など、積極的な取組みが行われている。</p>	<p>各種出版物、研究紀要の刊行は、収蔵品等に関する調査研究成果を公開するとともに、我が国の文化財研究の先導的な文献資料として高く評価されており、積極的な調査研究の発信の取組として評価される。また、電子書籍化も着実に進められている。</p>

【(小項目)1-3-2】 海外研究者の招聘		【評定】				
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(2)文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招聘し国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また、職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。</p>		A				
		H23	H25	H26	H27	
		S				
		実績報告書等 参照箇所				
		<ul style="list-style-type: none"> 自己点検評価報告書 個別表 p117-p120 3-(2) 海外研究者の招聘等研究交流の実施 自己点検評価報告書 統計表 p147-p173 共通資料 c-① 研究交流実績一覧 				
【インプット指標】						
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	9	5	3	4	5	6
従事人員数(人)	56	58	56	56	56	55
<p>※決算額は、国際シンポジウム開催に要するディスプレイ・旅費・滞在費等の決算額を計上している。</p> <p>※従事人員数は、東京国立博物館の学芸企画部企画課及び京都国立博物館、奈良国立博物館の各学芸部、九州国立博物館の学芸部企画課の常勤学芸職員の人数を計上している。</p>						
評価基準	実績				分析・評価	
○国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施したか。また、職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関や国際会議等に派遣したか。	<p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 海外の博物館・美術館等の研究者を招聘し、海外の研究者との交流を促進した。(4館) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣した。(4館) 特別レクチャー「海を渡った東博コレクションーヒューストンで魅せる日本美術」(25年3月26日、於:東洋館ミュージアムシアター、講師:ヒューストン美術館教育部長マーガレット・ミムズ氏)を行い、118名の参加があった。(東博) 国際シンポジウム「天皇・皇帝の書をめぐって」を実施した。(24年11月18日)(京博) 24年12月14日に東アジア仏教彫刻史に関する国際研究集会を開催し、許亨旭氏(韓国国立慶州博物館)が「慶州吐含山石窟庵彫刻」のタイトルで口頭報告し、これに岩井共二教育室長がコメントした。(奈良博) 				<p>海外研究者の招聘、研究員の海外研修派遣は、国際交流費予算に外部資金等を加え積極的に実施されており、京都国立博物館の海外研修者招聘を除いて、目標値を越える実績が達成された。</p> <p>特に研究員の海外派遣は、4館合計で22名程度の目標値に対して、実績は126名を数え、実現のための努力は高く評価できる。</p>	

- ・国際シンポジウム「あじわい尽くすベトナム」を24年11月18日に開催し、280名の参加があった。(九博)
- ・国際シンポジウム「第5回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」を開催し、170名参加があった。(九博)

【海外研究者招聘】指標: 年度計画

東京国立博物館(のべ6人)

A	B	C	実績	定量的評価
6人以上	5人以上6人未満	5人未満	11人	S

京都国立博物館(のべ5人)

A	B	C	実績	定量的評価
5人以上	4人以上5人未満	4人未満	3人	C

奈良国立博物館(のべ6人)

A	B	C	実績	定量的評価
6人以上	5人以上6人未満	5人未満	7人	A

九州国立博物館(のべ3人)

A	B	C	実績	定量的評価
3人以上	—	3人未満	3人	A

(目標値について)

海外研究者招聘人数の目標値は、年度計画策定時点で確定している国際交流費予算等を基に算出しており、24年度は4館合計で20人程度(内訳: 東京6、京都5、奈良6、九州3)を目標値として設定している。

【海外研究者招聘】(人)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	10	15	26	15	16	11
京都国立博物館	7	9	29	7	21	3
奈良国立博物館	9	9	29	9	20	7
九州国立博物館	38	18	37	9	21	3
4館合計	64	51	121	40	78	24

なお、海外研究者の招聘が減少したが、研究の進捗や海外交流展の実施状況に影響されたためであり、特に問題ないと判断する。

【研究員派遣】指標：年度計画
東京国立博物館(のべ6人)

A	B	C	実績	定量的評価
6人以上	5人以上6人未満	5人未満	34人	S

京都国立博物館(のべ6人)

A	B	C	実績	定量的評価
6人以上	5人以上6人未満	5人未満	15人	S

奈良国立博物館(のべ6人)

A	B	C	実績	定量的評価
6人以上	5人以上6人未満	5人未満	17人	S

九州国立博物館(のべ4人)

A	B	C	実績	定量的評価
4人以上	3人以上4人未満	3人未満	60人	S

(目標値について)

研究員の海外への派遣人数の目標値は、年度計画策定時点で確定している国際交流費予算等を基に算出しており、24年度は4館合計で22人程度(内訳：東京6、京都6、奈良6、九州4)を目標値として設定している。

【研究員派遣】(人)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	22	25	16	54	49	34
京都国立博物館	21	18	13	27	25	15
奈良国立博物館	6	6	30	14	19	17
九州国立博物館	44	35	46	77	56	60
4館合計	93	84	105	172	149	126

(参考)法人の自己評価

海外からの研究者招聘は24人、海外への派遣は126人と積極的に国際交流を進め、博物館に新たな知見を広めることができた。目標値と実績値の乖離については、海外研究者招聘、研究員派遣ともに、年度当初に決定している国際交流費等の予算を基に目標値を設定しているが、その後、海外交流展経費や外部資金等による実績を上げることができていることによる。24年度の海外研究者招聘実績が23年度比で減少している理由としては、海外から作品を借用して日本で開催する特別展の準備期間が23年度に集中しており、その関係で海外の所蔵館、主催館などの研究者招聘が、23年度は多かったことによる。該当する特別会は、特別展「北京故宮博物院200選」

	<p>(東博23年度)、「中国 王朝の至宝」(東博24年度)、「中国近代絵画と日本」(京博23年度)、「誕生！中国文明」(奈良博23年度)、帰国展「日本とタイーふたつの国の巧と美ー」(九博トピック展示23年度)、「草原の王朝 契丹ー美しき3人のプリンセス」(九博23年度)などである。</p> <p>また、今年度は国際シンポジウム3件(内訳:京博1件、九博2件)を実施したほか、国際研究集会を行う等、他国研究者との研究交流を推進した。</p>	
--	---	--

【(小項目)1-3-3】 博物館等関係者や修理技術関係者等を対象とした研修プログラムの検討、実施

【評定】
A

【法人の達成すべき目標(計画)の概要】

(3) 保存科学、修理技術及び博物館関係者等を対象とした研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施する。

H23	H25	H26	H27
A			

実績報告書等 参照箇所
・自己点検評価報告書 個別表
p121-p124 3-(3) 保存修理事業者への研修プログラム

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額百万円)	-	-	-	-	-	-
従事人員数(人)	50	51	50	50	48	47

※決算額は、研修テキストなどのコピー機を利用しての作成により外注額が少額のため、個別に計上できない。

※従事人員数は4国立博物館の常勤保存修復担当職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準

○ 研修プログラムを関係機関と連携しながら検討、実施したか。

実績

- 主な実績**
- ・特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)が主催する専門家セミナーに当館が共催し、当館を会場として「文化財保存修復専門家養成実践セミナー・レベルⅠ」(24年8月25日~9月4日の10日間)を開催した。当館は講師・プログラムの選定、及びセミナー会場・修理施設・展示施設の提供を行った。本セミナーの対象は、社会で活動している文化財保存修復専門家及び専門家を目指す学生である。内容は、国内外で活躍できる高度な能力を持つ専門家を育成するために、基礎能力の格段の向上を目指すものであり、既に現場で活躍している講師陣による実践セミナーである。受講生は全国から34名が参加した。(東博)
 - ・特別展覧会において、修理技術者に対する定例の研修会(熟覧)を実施した。(京博)
 - ・国内外の保存修復専門家による文化財保存修理所各工房での研修・視察を合計9回受け入れ、各工房技術者との間で情報交換を行った。(奈良博)
 - ・保存修理事業者を対象とした研修会等を開催した。(九博)

分析・評価

保存科学・修理技術関係者を対象とした研修プログラムを実施し、文化財の保存に関わる人材育成に努め、ナショナルセンターとしての役割が十分果たされていると評価できる。ただし、本格的な後継者養成事業とするにはあまりに予算不足である。後継者養成を博物館事業の根幹に据えるかどうかは、将来戦略との関わりの中で判断されるべきであろう。

<p>○業務の効率化について、教材作成作業等の効率化、研修施設の有効活用、施設管理業務の民間委託等の取組を行っているか。</p> <p>○受益者負担の妥当性・合理性があるか。</p>	<p>(参考)法人の自己評価</p> <p>昨年に引き続き東京国立博物館にて特定非営利活動法人文化財保存支援機構(NPO-JCP)主催の専門家養成実践セミナーを共催として開催し、京都国立博物館では特別展ごとに修理技術者に対する定例研修会を実施、奈良国立博物館、九州国立博物館でも博物館等関係者や修理技術関係者等対象の研修会・セミナー等を開催するなど、4館とも保存科学・修理技術の専門家を対象とした研修プログラムを実施し、文化財を将来にわたって保存していくための人材育成に努めている。</p> <p>【業務の効率化について】</p> <p>京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館では、関係者を対象に、文化財保存修理所内の工房視察や、各工房技術者との情報交換等が主であり、主催者側が用意した教材に沿って行われるものではないため、一般的な研修とは異なる。また、専用の研修施設もない。実施にあたっては、業務効率化の観点に意識し実施している。</p> <p>東京国立博物館では、NPO主催の専門家セミナーへの共催という形をとっており、館内の修理施設・展示施設を会場として提供している。教材はNPOが作成している。</p> <p>【受益者負担の妥当性・合理性について】</p> <p>文化財保護に必要な人材の育成を目的としているものである。よって、これらの研修の受講を必要とする者の参加を促進し文化財保護に必要な知識・技術等の普及を図るため、受講料無料は妥当と考える。</p> <p>東京国立博物館共催の専門家セミナーにおいても、東京国立博物館としては受講料を徴収していない。</p>	<p>京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館で行われている研修は、現地視察と情報交換等により実施されている研修であり、効率的なものであると判断する。また、東京国立博物館では、研修会場を提供しているが、現存施設を有効に活用していると判断する。</p> <p>受講料は徴収していないが、文化財保護のために必要な人材の養成と、必要な知識・技術等の普及を目的とした研修であり、文化財の保存と維持を使命とするナショナルセンターとして、妥当であると判断する。</p>
---	---	---

【(小項目)1-3-4】	収藏品貸与の推進	【評定】				
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(4)収藏品については、その保存状況を勘案しつつ、公私立の博物館等の要請に対し、展示等の充実に寄与するため貸与を実施する。</p>		A				
		H23	H25	H26	H27	
		A				
		実績報告書等 参照箇所				
		<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検評価報告書 個別表 p125-p128 3-(4) 収藏品の貸与 ・自己点検評価報告書 統計表 p102-p103 3-(4) 収藏品の貸与 				
【インプット指標】						
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	13	11	14	14	11	22
従事人員数(人)	98	99	103	105	100	99
※決算額は、考古相互貸借事業にかかる輸送費・資料保存箱作成費等の決算額を計上している。						
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。						
評価基準	実績				分析・評価	
○収藏品の保存状況に配慮した貸与を実施したか。	<p>主な実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の博物館等へ積極的に貸与を行った。(4館) ・北九州市立自然史・歴史博物館、宮崎県立西都原考古博物館と協力して考古資料の相互貸借を実施した。(東博) ・本年度も継続してウェブサイトにて「貸出作品リスト」の公開を行った。(京博) ・長崎歴史文化博物館、香崎市立一支国博物館、福島県立博物館、福岡市博物館、九州歴史博物館の計5館との間で相互貸借事業を実施した。(奈良博) 				<p>収藏品の保存状態に配慮しつつ、国内各地の博物館との相互貸借事業を適切に実施し、貸与館の展示事業を豊かなものに行っていると評価できる。</p> <p>また、京都国立博物館で公開している「貸出作品リスト」は貸借を希望する博物館等にとっても意義ある情報提供であり、取組のさらなる広がりを期待する。</p>	

(参考)文化財の貸与件数

【文化財の貸与件数】 (件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	1,302	1,125	1,104	1,315	905	1,295
京都国立博物館	171	246	428	297	429	304
奈良国立博物館	137	163	108	159	118	102
九州国立博物館	104	106	89	165	119	113
4館合計	1,714	1,640	1,729	1,936	1,571	1,814

(参考)貸与先件数

【貸与先件数】(館)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	149	135	124	150	129	159
京都国立博物館	60	45	68	74	74	71
奈良国立博物館	37	47	34	43	37	37
九州国立博物館	37	44	23	34	26	44
4館合計	283	271	249	301	266	311

(目標値について)

文化財の貸与件数及び貸与先件数については、目標値を設定していない。文化財の貸与は、先方からの依頼に基づいて行うものであり、外部での展覧会開催回数に大きく影響され、定量評価になじまないため。

(参考)法人の自己評価

所蔵品・寄託品の貸与については、国内外の博物館等からの要請に対し、文化財の保存状況を見極めながら、積極的に対応した。4館合計の貸与件数は1,814件であり、23年度比は243件増(約15%増)であった。貸与先件数も23年度比は45館増(約17%増)であり、それぞれ増加した。これは、23年度実績が、東日本大震災直後の全国的な展覧会等自粛の動きによる影響を受け、開催された展覧会数自体が減少していたものが、24年度は回復したことによるものと考えられる。なお、京都国立博物館においてウェブページでの京都国立博物館収蔵品の「貸出作品リスト」を公開している(寄託作品や個人名は伏せている)。このような情報の公開は、日本の博物館では極めて画期的なものである。

【(小項目)1-3-5】 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言	【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】 (5) 公私立博物館等に対する援助・助言を行うとともに、博物館関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等を行う。	A			
	H23	H25	H26	H27
	A			
	実績報告書等 参照箇所			
	<ul style="list-style-type: none"> ・自己点検評価報告書 個別表 p129-p132 3-(5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進 ・自己点検評価報告書 統計表 p104-p112 3-(5) 公私立博物館等に対する援助・助言 			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	—	—	—	—	—	—
従事人員数人)	98	99	103	105	100	99

※決算額は、公私立博物館・美術館等に対する援助・助言に係る外注額が少額なため、個別に計上できない。
※従事人員数は4国立博物館の全常勤学芸職員の人数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
○公私立博物館等に対する援助・助言を行ったか。	主な実績 ・公私立の博物館・美術館等が開催する展覧会及び運営等に対し、援助・助言を行った。特に24年度は、23年度に引き続き、東日本大震災の文化財レスキュー事業(被災文化財等救出作業支援)を行った(東博8件、京博2件、九博3件)。(4館) ・新規貸与館 15 館に対する環境調査を実施し、東京文化財研究所と協力して指導助言を行った。(東博) ・石川県立美術館で開催される特別展「国宝薬師寺展」(主催:同展実行委員会、会期:平成25年4月26日～6月23日)への学術協力として、同展への助言と図録原稿の執筆を担当した。(奈良博)	四館が蓄積する専門的知識は、他館の作品保存や展示のよりどころであり、公私立博物館等の展示や運営に関して、適切な援助・助言を行っているとして評価できる。 特に、文化財レスキュー事業で立入警戒区域での搬出作業などに尽力したことは、ナショナルギャラリーの役割を十分に果たしたと高く評価できる。このような経験はケーススタディとして記録し、諸外国にも必要に応じて情報を提供できるようにしておくこ

(参考)公私立博物館等に対する援助・助言件数

【公私立博物館等に対する 援助・助言件数】 (件)	過去の実績に関する経年データ					24年度
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	
東京国立博物館	124	134	139	84	126	85
京都国立博物館	81	114	114	123	1	65
奈良国立博物館	5	5	25	35	98	67
九州国立博物館	38	47	39	77	97	109
4館合計	248	300	317	319	412	326

(目標値について)

公私立博物館に対する援助・助言件数については、目標値を設定していない。援助・助言は、先方からの依頼に基づいて行うものであり、外部の要因によって実績値が決定し、定量評価になじまないため。

(参考)法人の自己評価

公私立博物館・美術館等に対する援助・助言件数については、対外的要因の影響が大きく目標値設定になじまないため、今中期計画から目標値を設定していないが、各館とも我が国の博物館の中核としてふさわしい内容・件数の援助・助言を行っている。特に東日本大震災により被災した館に対する文化財レスキュー事業(被災文化財等救出作業支援)については、24年度は、福島県富岡町歴史民俗資料館をはじめ、放射能汚染立ち入り警戒区域からの文化財資料救出作業などを行った。

とが望まれる。